

挑 戦

-救急救命士の未来に向けて、今、心をひとつに-



第1回 日本体育大学救命蘇生研究会 概要集

救急蘇生・災害医療学研究室

挑 戦

- 救急救命士の未来に向けて、今、心をひとつに -

第 1 回日本体育大学救命蘇生研究会概要集

目 次

プログラム	2
研究会当日の様子	4
研究会長挨拶	7
基調講演	9
特別講演	11
口演 1 「それぞれの『挑戦』」	17
口演 2 「災害に立ち向かう」	27
口演 3 「医療従事者として」	37
パネルディスカッション「日体大救急医療学科の将来展望」	48
来場者アンケートの結果	58
参加者一覧	63
編集後記	64

学生の発表の様子は、下記 QR コードより動画を見ることができます。



https://youtu.be/nFK_C5q1c_g

プログラム



第1回 日本体育大学 救命蘇生研究会

挑 戦 - 救急救命士の未来に向けて、今、心をひとつに -

主催：日本体育大学 救急 蘇生・災害医療学研究室

共催：東京消防庁 救助救急研究会

- ・日 時 2018年8月25日(土)9:30~18:00 (受付9:00-)
- ・場 所 日本体育大学 世田谷キャンパス 世田谷区深沢7-1-1
- ・内 容 救急医療学科在校生・卒業生・教員・医療従事者等による研究発表と意見交換
- ・参加費 無料(救命蘇生学に興味のある方はどなたでも参加できます。)
- ・問合せ先：救急 蘇生・災害医療学 研究室 中澤 真弓 (9421研究室)

電話 045-507-7294 内線 879 メール nakazawamayumi@nittai.ac.jp

参加をご希望される方は、参加申込フォームに入力または問合せ先までお知らせください。

※ 研究会の発展のため、受付時にアンケートを配布いたします。お帰りの際に受付の回収箱にご提出ください。
また、研究会当日の記録写真を広報に活用させていただく場合がございます。ご協力をお願いいたします。

懇親会のご案内

研究会終了後、学生食堂「レオック」にて懇親会を開催いたします。飲み物と軽食を準備いたします。
ぜひご参加ください。ご参加いただける方は、当日、受付で参加費1,000円を頂戴させていただきます。
(未成年の学生も多数参加するため、アルコール飲料は控えていただきます。)

プログラム

※演題は2018年8月21日現在のものであり、変更になる場合があります。

第1会場 教育研究棟2階2201教室

9:30 - 9:40 開会式

9:40 - 10:40 基調講演 山本 保博 教授 東京曳舟病院院長・保健医療学研究科 教授
座長：小川 理郎

「地震災害や豪雨被害をニュース番組はどう伝えたか。過大報道や流言報道を考える。」

10:45 - 12:00 口演① それぞれの「挑戦」

座長：小玉 響平(4年) 助言者：鈴木 健介 准教授

1. 齋藤 千真(4年) 部活動の顧問や生徒のニーズに合わせたファーストエイドコースの作成とその有用性についての途中経過報告
2. 高橋 治花(2年) Emergency first aid for NGO講習会について
3. 栗屋 天翔(2年) 米国シアトル救急車同乗実習の効果
4. 池田 匠(2年) 実習の補講による意識改革
5. 宇田川 美南(救急救命専門指導教員) 救急救命士の大学院進学
6. 西本 好希(NITグループ日本情報通信株式会社【NITC】) IT企業で働く救急救命士
7. 宮永 彩加(日本医科大学多摩永山病院) 救急救命士資格を有する看護師の役割
8. 小澤 貴裕(一般社団法人ファーストエイド) CPRトレーニングポトルの開発と、心肺蘇生法普及啓発の新たな取り組み
9. 大島 健太郎(卒業生) 国家試験合格を目指した勉強会「大島組」

12:00 - 12:45 休憩

12 : 45 - 14 : 00 □演② 災害に立ち向かう

座長：斎藤 千真（4年） 助言者：原田 諭 救急救命専門指導教員

1. 川邊 貴大（4年） 学生消防団員の意識調査
2. 岡野 透（4年） 過去の災害から見る自助・共助
3. 小玉 響平（4年） 本学の学生を対象としたロジスティクス研修の実施について
4. 郡 愛（3年） 小田原市酒匂川花火大会救護対応
5. 須賀 涼太郎（助手） 呉市豪雨災害ボランティア活動報告
6. 北野 信之介（院生） 平成30年7月豪雨の活動を通して考えるロジスティクスの業務改善
7. 井上 将仁（東京医大八王子医療センター） 南多摩医療圏災害医療ワーキンググループの活動
8. 坂田 健吾（救急救命専門指導教員） 気温データより救急出場件数が予測できるか
9. 服部 充宏（日本気象協会） 気象と熱中症

14 : 00-15 : 25 □演③ 医療従事者として

座長：川邊 貴大（4年） 助言者：小倉 勝弘 救急救命専門指導教員

1. 阿部 雅治（2年） 車と自動二輪車の接触事故について
2. 伊藤 彩奈（2年） 小田原北條五代祭りでの救護活動報告
3. 伊藤 俊孝（2年） 青葉台駅内における過換気症候群の女性の対応について
4. 池沢 司（2年） ライフセービング活動におけるFA対応について
5. 緑川 亮（2年） 一年次解剖実習を振り返って後輩に伝えたいこと
6. 天野 智仁（1年） 傷病者対応についての症例報告
7. 山田 桃由（1年） 海浜実習についての報告
8. 佐藤 ゆずほ（1年） スパルタンレースの救護対応
9. 篠田 櫻（1年） 救助救命医療学演習についての報告
10. 望月 海咲（1年） 熱中症対応

15 : 30 - 16 : 20 特別講演 田邊 晴山 教授 救急救命東京研修所・日本医科大学救急医学教室

「救急現場での処置拡大をふまえた今後の救急救命士養成教育のあり方」

16 : 25 - 17 : 30 パネルディスカッション「日体大 救急医療学科の将来展望」

司会：野口 英一 学事顧問

2014年に開設された学科は完成年度を終了し、今年度で5年目を迎えた。救急 蘇生学、災害医療、国際活動の3つを柱として、実践的な指導的な立場で活躍する人材育成と研究、地域貢献などに今後取り組んでいく。また救急災害医療修士の大学院も開設されさらなる飛躍が望まれる。病院前救護の現状を踏まえパネリストに当学科の将来展望について語ってもらおう。

1. 須賀 涼太郎 救急医療学科 助手
2. 北野 信之介 保健医療学 研究科修士課程
3. 藤本 賢司 横浜市消防局
4. 吉田 茂男 救急救命専門指導教員
5. 中澤 真弓 救急医療学科 准教授
6. 鈴木 健介 救急医療学科 准教授
7. 小川 理郎 救急蘇生災害医療学 研究室長

17 : 30 - 閉会式

第2会場 教育研究棟2階2202教室

10 : 40 - 15 : 30 交流ラウンジ

在校生・卒業生・参加者が自由に交流していただけるよう、スペースを開放しております。
展示ブース、就職相談、休憩コーナーなど、ご活用ください。

12 : 15 - 13 : 45 ワークショップ「学校における緊急時の対応」

講師：鈴木健介

「緊急時の対応シミュレーション」を体験して頂き、
学校で開催するために必要なノウハウをお伝えします。
事前予約はこちらから→<https://goo.gl/forms/c1NrQEsh9BK9sr872>

* 文部科学省科学研究助成事業「養護教諭が行う緊急度評価能力の検証と教育システムの開発」の一環として開催しております。

研究会当日の様子（記録写真より）



小川研究会長挨拶



東京消防庁救助救急研究会 竹内会長挨拶



山本保博先生基調講演



日本体育大学 今村常務理事挨拶



第1会場では、発表に対する意見交換が積極的に行われた



助言者の教員のもと、座長を務める学生



第2会場では、ポスターの掲示や展示ブースが設置された



ワークショップ「学校における緊急時の対応」



学生による司会



受付の様子



閉会式での表彰



意見交換会



研究会長挨拶

救急蘇生・災害医療学研究室長
教授 小川 理郎



2014年に4月に日体大に救急医療学科が開設されて以来、最初に日体大生に蘇生法の知識と手技を確実に身につけてほしいという想いから、わかりやすく実際に生かせるBLS(蘇生法)の教育方法を再考し、2015年11月30日、第1回救命蘇生法講習会として体育学部の部活学生を対象に開催しました。今では当学科の学生がインストラクターに成長し、日体大の教職員、部活生、地域住民などの方々に毎年数回に指導しています。その母体となる救急蘇生法研究会を開催することが、私の悲願の1つでした。

まず最初に、今回、研究室教員の努力とご協力いただいた方々のご尽力によってこの研究会が開催できたことに感謝を申し上げます。ありがとうございました。

この研究会は“オール日体、日体ファミリー”として、1つにまとまり、傷病者と家族の真の幸福を考え、人道的な判断で救急救命士として現場活躍することを共感する会です。アウトプットの環境が整い、学生は発表することで、モチベーションの向上や自己成長につながるでしょう。我が子の成長をみた保護者の方々は、誇らしさと同時に日体大救急医療学科の教育力のすばらしさにも感銘されるでしょう。

救命救急医療の医療職に携わる人材を養成する大学は、病院前救護/医療の学問体系の教育に加えて、この領域での社会貢献や実績が求められます。これからこの研究会は、それらの役割が少しでも担えるように努力しなければなりません。“挑戦”というタイトルには、新しく誕生した学科が、さらに成長し、病院前救護/医療で社会貢献して‘日体大救急医療’として邁進するための意味が包含されています。

社会復帰するための人命救助活動の壁は厚く、高く、その‘巨大な相手’との戦いに、挑戦され、日々奮闘され、数々の厳しい救急現場から得られた貴重なノウハウを厚く語っていただくために、現在全国で活躍されている卒業生、OB、OG、また医療関係者の方々にもこの研究会に参集していただきました。

東京曳舟病院長、日本体育大学名誉顧問、保健医療学研究科教授の山本保博先生と日本の病院前救護/医療で第一人者の救急救命東京研修所の田邊晴山教授をお招きして、初陣に華を添えていただきました。また東京消防庁救助救急研究会の竹内会長らに共催していただき盛会となりました。日頃の学習成果と様々のイベントから得られたことを報告した学生はとでも頼もしく思いました。最後のパネルディスカッションでは、決して夢物語でなく、現実的な将来展望として語る事ができたと思います。これらをまとめた概要集ができたことは素晴らしいと思います。

日本で、広く普及している外傷初期診療のための教育コースを生み出した日本外傷学会・学術集会は、約40年前、日本医科大学救命救急センターと横浜市済生会神奈川病院外科との間で外傷症例を持ち寄って症例検討会から始まりました。

これから、日体大救命蘇生研究会も、学科の独自性を持ち、救急救命士としての知識・技術の維持とさらに今後求められる再教育の環境、生涯教育を整備し、その一役を担う必要があります。まずは演題数を増やし、複数の病院前での教育コースも併用して、将来は学会へと変貌すれば、どんなにすばらしいことでしょう。救急現場活動では、救急医療の知識、技術に加えて、大胆な意思決定を遂行しつつ、その上に高い倫理観と崇高な精神が求められ、大変な努力と労力が求められますが、我々には、目の前で困窮する人々や命を助けたときに得られる決して絶えることのない“誇らしい満足感”が待っています。

これからも皆様のご指導・ご協力・ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。



基調講演

「地震災害や豪雨災害をニュース番組はどう伝えたか。
過大報道や流言報道を考える」

山本 保博 教授
東京曳舟病院院長・保健医療学研究科 教授

座長：小川 理郎



最近の大規模地震災害を ニュースはどう伝えたか

過大報道や流言蜚語報道を考える

医療法人伯風会 東京曳舟病院
病院長 山本 保博
経営情報課 鈴木 強司
救急救命士 長橋 和希
救急救命士 倉貫 裕也

原発事故と放射能漏れに対する 外国大使館の対応

1. 大使館の一時閉鎖と
大阪に退避 32ヶ国
2. 日本製品の輸入禁止 50ヶ国
3. 2011年日本を訪問した外国人
714万人
(前年の24.4%減少)

法務省入国管理局調べ
2011年4月15日

福島県の警戒地域における 流言蜚語

1. 死体をカラスが啄んでいる
2. 中国人の窃盗団が略奪行為を
行っている
3. 福島県民が避難していた
避難所に駐車していた自家用車に
「汚染車」と落書きされた

東日本大震災後の被災民の 不安について

パーセント	理由
54.9(%)	福島第一原発の今後の推移
43.7	余震が多く続いていること
36.1	全国の原発の安全性を再チェック
34.5	日本が地震の活動期に 入ったのではとの不安

2011.9.
NTTセキュアプラットフォーム研究所調査

福島原発とチェルノブイリの比較

- 福島第一原発事故はメディアを通してみられた
世界最悪の事故だった
- チェルノブイリ原発事故は、メディアでの露出は
限定的だった
- 最初はスウェーデン原発モニタリングポストで
異常な放射性物質が検知された
- 風向きからソ連邦で大きな事故が発生したと
考えられ、被害の様子が小出しに伝えられていった

東日本大震災後に流布された 流言について

- 首都圏で石油精製工場が火災
それが原因で有害化学物質を含んだ雨が降る
...千葉県民 34.0%
...東京・埼玉 24.9%
- 渋谷の原発から放射能が発生している
(米FOXニュース)
- 被災地で餓死者が発生
- 誰かが貯水池やダムに毒を入れている
- 動物園から動物が逃げた
(複数メディア)

関東大震災時 井戸水に毒を投げ込んだ

- 井戸水に毒を投入したという話は中世ヨーロッパで
ペスト菌を井戸水に投げ込んだという流言は報告
されている
- 1923年の関東大震災当時、コレラが流行していた
為、公衆衛生上の対応として消毒液をまいていたの
を住民が毒薬を投入したと誤解した
- 地震によって井戸水や池が濁ることはよくあり、
この現象を毒物投入と間違えた

人々の不安やフラストレーションが 差別感情と結びついていった

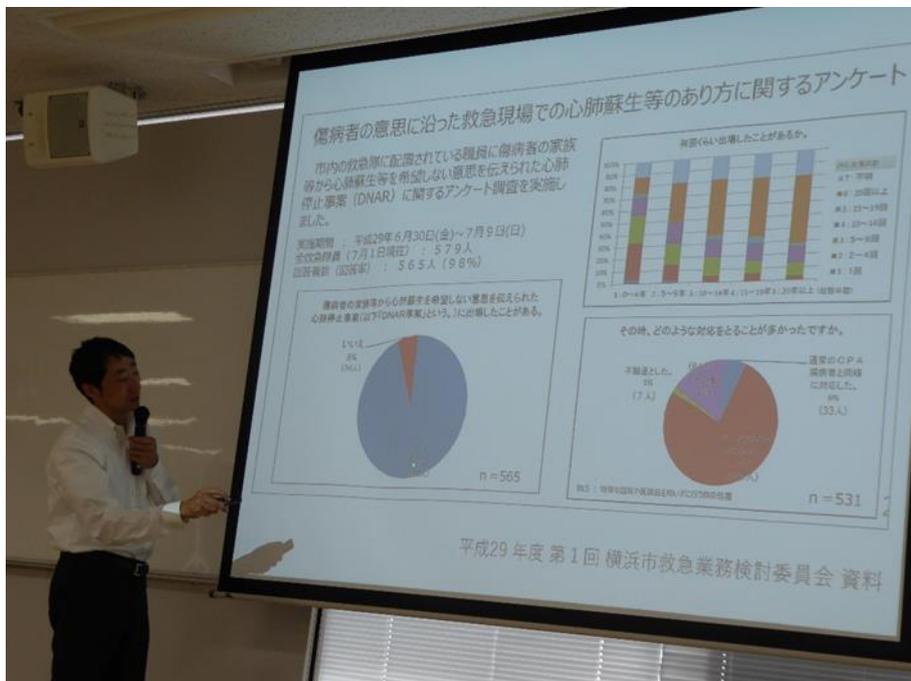
- 不安が差別感情に結びついた
- 情報不足が不安と結びついていった
- 攻撃性へ転嫁していった内外メディア
 - ・地震の混乱に乗じて朝鮮人が
放火を行っている
 - ・伊豆大島に爆弾を仕込んで関東大震災
を起こした

特別講演

「救急現場での処置拡大をふまえた今後の救急救命士養成教育のあり方」

田邊 晴山 教授

救急救命東京研修所・日本医科大学救急医学教室



平成30年8月25日(土)
日本体育大学
世田谷キャンパス

第1回 日本体育大学 救命蘇生研究会
挑戦 - 救急救命士の未来に向けて、今、心をひとつに -

救急現場での処置拡大をふまえた
今後の救急救命士養成教育のあり方

救急救命東京研修所 田邊晴山

救急救命士の業務の拡大

- ① 救急救命士の業務の場所の拡大
- ② 救急救命士の処置の拡大

年	救急救命処置	契機	検討の場
H15	除細動の包括指示化	救急救命士制度 発足時からの 検討事項	病院前救護体制の あり方に関する検 討会など (厚生省)
H16	気管チューブを用いた気管挿管		
H18	エピネフリン（アドレナリン） の投与		
H21	エピペン（自己注射型エピネフリン製剤） の使用	国会の委員会での 要望	厚生労働科学研究 の要請 (野口氏)
H23	ビデオ硬性喉頭鏡を用いた 気管挿管	新しい資器材に 対する照会	救急業務高度化推 進検討会 (消防庁)
H26	心肺停止前の静脈路確保と輸液 血糖測定とブドウ糖の投与	構造改革特区へ の提案	救急救命士の業務 のあり方に関する 検討会 (厚生労働省)

エピペン

拡大の経緯

エピペン拡大の経緯

○ 第168回参議院
平成19年10月 予算委員会
(質問：浜四津議員)

次に、食物アレルギーについてお伺いします。・・・
(略)・・・これは素人の人でも簡単にできるエピペンでござい
ます。AEDより簡単、こう言われております。ましてや
救急救命士の方にとっては、高度な様々な特定行為をやって
おられる救急救命士の方にとっては、これを打つということ
はそれほど難しいことではないはずでございます。是非救急
救命士の使用を可能にさせていただければ、どれだけ多くの命
が救われるかわかりません。是非一日も早くこれを認めてい
ただきたいと思いますが、大臣いかがでしょうか。

第168回参議院予算委員会議事録抜粋

エピペン拡大の経緯

(答弁：舛添厚生労働大臣)

・・・例えば学校で給食を食べている子、食物アレルギーで今言ったアナフィラキシー症状を起こしちゃう。そうすると、もう119番掛けるわけですね。救急車が来る。今これ私も見ましたけれども、ぼっと刺すだけでいい。・・・(略)・・・そこで、これ総務省、消防庁とも今協議を開始しておりまして、何とか救急救命士の業務の範囲内にこれを入れたいと、早急を実現すべく頑張っ
てやりたいと思います。

心肺停止前の静脈路確保と輸液 血糖測定とブドウ糖の投与

拡大の経緯

- 平成20年～
地域MCの協議会からの構造改革特区への提案
- 平成22年度～
4月 救急救命士の業務のあり方に関する検討会報告書
(厚生労働省)

「(新しい処置について) MC体制が十分に確保された地域において、研究班が中心となって、医療関係者と消防関係者が共同で実証研究を行い、その結果を踏まえ、本検討会において、救急救命士の処置として実施するか検討することが適当～」

→ 実証研究のための体制について研究

- ①血糖測定と低血糖発作症例へのブドウ糖溶液の投与
- ②重症喘息患者に対する吸入β刺激薬の使用
- ③心肺機能停止前の静脈路確保と輸液

- 平成24年度
 - 4月 実証研究参加MCの公募、選考、公表 (39MC協議会、126消防本部)
 - 7月 実証研究の非介入期間の開始
 - 10月 実証研究の介入期間の開始 (～1月)
 - 3月 最終解析結果を報告 (第5回救急救命士の業務のあり方等検討会)
- 平成25年度
 - 8月 救急救命士の業務のあり方等に関する検討会報告書 (厚生労働省)

→ 次の処置の追加の方針が提示

 - ①血糖測定と低血糖発作症例へのブドウ糖溶液の投与
 - ②心肺機能停止前の静脈路確保と輸液の2処置

- 平成25年度
 - ①教育研修体制
 - ・新しい処置に関する追加講習カリキュラム (案) の策定
 - ・救急救命士学校養成所の教育内容 (案) の策定
 - ・シミュレーション試験等の評価票の策定
 - ②指示指導助言体制
 - ・新しい処置のプロトコール (案) の策定
 - ③事後の検証体制
 - ・事後検証票 (案) の策定
 - ・ 1月 新しい処置に関する通知の発出① (厚生労働省、消防庁)
 - ・ 3月 新しい処置に関する通知の発出② (厚生労働省、文部科学省)

これまでの経緯を確認すると・・・

拡大の契機、検討の場、手順は不定

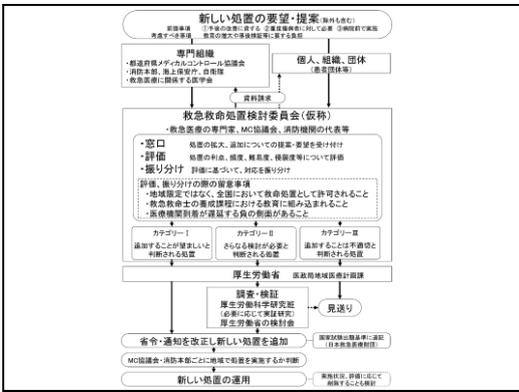
救急救命士の業務のあり方等に関する検討会報告書 (厚生労働省 平成25年 8月)

「・・・今後の処置の範囲の拡大に関しては、一貫性のある評価方法を検討する必要があるのではないか」

医学、医療は絶えず進歩・発展
救急救命処置の範囲についても、継続的な検討が必要

→ 今後の救急救命処置の追加・除外等の基本的な手順、流れを定められないか？

今後の救急救命処置の拡大は公募



救急救命処置検討委員会の役割

- 救急救命処置の追加、除外についての提案を受けける窓口
- 提案の評価
- 評価に基づいた振り分けと厚労省への報告

平成26年度
厚生労働科学研究「救急救命士の処置範囲に係る研究」
(研究責任者：野口宏)

提案された処置の評価

- ① 効果 (利点)
処置に要する時間、病院到着が遅延することによる負の影響も考慮
- ② 実施頻度
講習、実習、器具の配備などには費用、時間を要するため、効率性を考えると頻度の評価も重要
- ③ 難易度 (必要な講習、実習)
ア 手技の難易度
イ 処置の適応を判断する難易度 (オンラインMCの要否)
- ④ 侵襲度、危険度の評価
- ⑤ 経費
- ⑥ 他の医療資格者、諸外国で実施状況

平成26年度
厚生労働科学研究「救急救命士の処置範囲に係る研究」
(研究責任者：野口宏)

評価に基づいた振り分け

- カテゴリー I
速やかに救急救命処置として追加することが望ましいと判断される処置
- カテゴリー II
実証研究などさらなる検討が必要と判断される処置
- カテゴリー III
追加することは不適切であると判断される処置

平成26年度
厚生労働科学研究「救急救命士の処置範囲に係る研究」
(研究責任者：野口宏)

募集する提案

救急救命処置について

- 新しい処置の追加の提案
- 既存の処置の除外・見直しについての提案

(対象外)

- 救急救命士法（第2条）が規定する救急救命処置の前提条件を満たさないもの
- 倫理的に不適切と考えられるもの

(救急救命士法第二条)

「救急救命処置」とは、重度傷病者が病院又は診療所に搬送されるまでの間に、当該重度傷病者に対して行われる気道の確保、心拍の回復その他の処置であつて、当該重度傷病者の症状の著しい悪化を防止し、又はその生命の危険を回避するために緊急に必要なものをいう。

提案する処置が 予め満たすべき事項

- ✓ 「症状の著しい悪化を防止し、又はその生命の危険を回避するため」に行われるもの
- ✓ 「重度傷病者」に対して必要なもの
- ✓ 「病院又は診療所に搬送されるまでの間」に行うもの

提案者の要件

- ① 都道府県・地域MC協議会
消防機関、海上保安庁
 - ② 次の団体・学会
 - 全国衛生部長会
 - 全国消防長会
 - 全国保健所長会
 - 公益社団法人日本医師会
 - 一般社団法人日本救急医学会
 - 一般社団法人日本臨床救急医学会
 - 公益財団法人日本麻酔科学会
 - 一般財団法人救急振興財団
- ※全国MC協議会連絡会世話人会の構成団体

提案者の要件

- ③ その他の団体、個人
- ✓ 当面の間、①と②からの提案を受け付け、その後、③からの提案も受け付ける予定
 - ✓ ③からの提案を受け付ける場合には、②に掲げた団体による推薦を必要とする予定

提案の窓口

- 日本救急医療財団 ホームページで電子的に受付を予定

利益相反の管理

- 提案者は利益相反に関する申告書の提出

20	募集 目的
21	募集 募集要項
22	募集 募集要項
23	募集 募集要項
24	募集 募集要項

評価

- 提案書に記載された内容を評価
- 提案書への不記載、資料の不足等がある場合には、提案者に対して、提案書の加筆修正や資料の追加などを依頼

(留意点)

- ✓ 委員会側による調査は実施を予定せず

評価

- 提案ごとに評価に要する期間は異なり、長期間を要する場合もあると想定
- 振り分け結果の厚生労働省への報告は、受け付け順とは異なる

(参考)

心肺停止前の静脈路確保と輸液

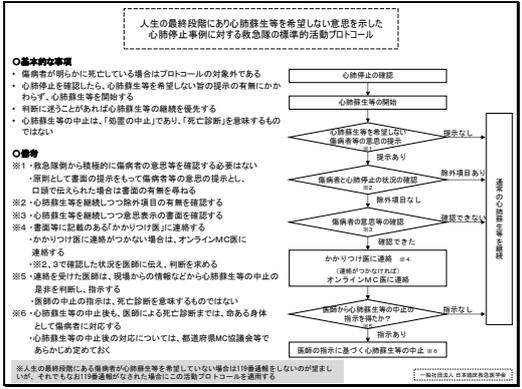
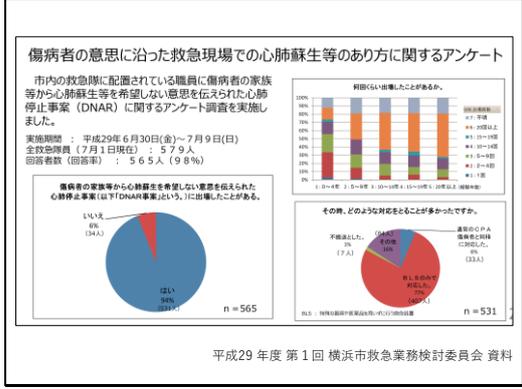
→ 政府への特区提案から・・・およそ5年

(留意点)

- ✓ 評価手順の細部の見直しあり

ま と め

- 医学、医療は絶えず進歩・発展しており、救急救命処置の範囲についても、継続的な検討が必要
- 日本救急医療財団は、厚生労働省からの委託を受け、「救急救命処置検討委員会」を設置し、救急救命処置の追加・除外についての提案を本年度より公募
- 病院前医療の発展とともに、救急救命処置も徐々に拡大の見込み



人生の最終段階にある傷病者の意思に沿った救急現場での心肺蘇生等のあり方に関する標準

一般社団法人 日本臨床救急医学会

1. はじめに

人生の最終段階にある傷病者（患者）が、救急隊員について自分で判断できなくなった場合に、その意思に沿った活動を行うことが望ましい。その意思は、口頭での意思表示や書面での意思表示が認められる。その意思は、口頭での意思表示や書面での意思表示が認められる。その意思は、口頭での意思表示や書面での意思表示が認められる。

2. 標準

心筋停止を確認した際、救急隊員は心筋蘇生等の実施を希望しない旨の指示を受けた場合、その指示に沿った活動を行う。その指示は、口頭での意思表示や書面での意思表示が認められる。



NEWS 埼玉県西部第一地域メディカルコントロール協議会がDNARへの具体的な対応を承認

今年4月、日本臨床救急医学会は、「人生の最終段階にある傷病者の意思に沿った救急現場での心肺蘇生等のあり方に関する提言」を掲載した(提言)8月号に詳しく掲載。いわゆるDNARへの具体的な対応が示されています。本提言を参考に、各現場における具体的な対応が期待されているところである。

埼玉県西部第一地域メディカルコントロール協議会は、5月27日(水)、本提言を参考として救急現場での具体的な対応を承認した。本協議会は、5月にDNARの事例を掲載したため、提言を参照するべく提言を参照していたが、今年1月に設置したワーキンググループで具体的な対応を定め、その提言を承認されたこととなった。

承認されたのは、以下の通り

① DNARプロトコル
救急現場で、心臓蘇生を希望しない傷病者がいる場合のプロトコルである。基本的に、日本臨床救急医学会が示した提言に基づき、

2017 12

3 終末期を迎えた心肺機能停止患者への対応

日本臨床救急医学会は、本年4月に「人生の最終段階にある傷病者の意思に沿った救急現場での心肺蘇生のあり方に関する提言」を取りまとめ公表しました。(別添参照)。

この提言は「**傷病者が心肺蘇生等を希望していない場合の基本的な対応手順**」等を示したものです。

現時点でこの提言を受けた厚生労働省や総務省消防庁の対応はなく、今後の動向を注視する必要がありますが、いずれにしても、提言をもとに市内の実情を十分に考慮した**横浜市の対応手順を策定する必要があります**。

平成29年度 第1回 横浜市救急業務検討委員会 資料

提言の拡がり

(2017年4月 提言の公表)

- 消防庁、厚労省への働きかけ
- 埼玉県西部第一地域メディカルコントロール協議会においてプロトコルを承認 (9月)
- 横浜市消防局、東京消防庁などでも検討が開催
- 消防庁において検討が開始

平成30年度
救急業務のあり方に関する検討会

傷病者の意思に沿った救急現場における心肺蘇生の実施に関する検討部会(WG)

救急業務の現状と心肺蘇生を望まない傷病者への対応について

平成30年5月30日(水)
消防庁救急企画室

提言だけでは・・・

- 救命を望まないのであれば、119番通報に至らない社会の実現
- 傷病者の意思の確認の過程、医師による指示が出されるまでの過程の適切性の確保
- ・・・ ACP アドバンス・ケア・プランニング

まとめ

- 生/死への関与が、さらに増大
- 医療倫理への深い理解が必要

背景
病院前で行われる医療が増えるにつれ、病院で生じていた問題が病院前にも。

今後の教育のあり方、学ぶべきもの

- さらなる処置の拡大、役割の拡大を念頭においた教育が必要

今、救急救命士ができることを前提にした教育では、対応できない可能性がある

- 基礎医学(解剖、生理)、病理(病態の理解)などが大事・・・Back to The Basic
- 医療倫理、社会医学などについても

口演 1 それぞれの「挑戦」

助言者：鈴木健介（救急医療学科准教授）

1. 齋藤 千真（4年）部活動の顧問や生徒のニーズに合わせたファーストエイドコースの作成とその有用性についての途中経過報告

スポーツ救急という分野に関する研究で、スポーツの特性に合わせたファーストエイドのコースを構築している。ラグビー部では脳震盪が多く、その対応方法についてパイロットコースを行った。今後、アンケート調査をしていく計画がある。

2. 高橋 治花（2年）Emergency first aid for NGO 講習会について

NGOのスタッフを対象としたファーストエイドの講習会についての報告であった。各国における文化や宗教の背景を踏まえた内容に改善する必要がある、NGOのセキュリティプランに組み込む必要性が考えられた。

3. 栗屋 天翔（2年）米国シアトル救急車同乗実習の効果

米国シアトル救急車同乗実習に参加した学生と参加しなかった学生の勉強意欲に関する研究であった。国家試験対策や医療英語・英会話など様々な面で学習意欲向上に繋がることが示唆された。

4. 池田 匠（2年）実習の補講による意識改革

シミュレーション実習における補講の効果についての発表であった。自主的に補講を行うことで、学習意欲向上効果があることが明らかになった。

5. 宇田川 美南（救急救命専門指導教員）救急救命士の大学院進学

救急救命士として大学院に進学することで、臨床、研究、教育といった分野で成長できるという自らの経験について講演して頂いた。

6. 西本 好希（日本情報通信 NI+C(株)）民間企業で働く救急救命士の一例

救急救命士として一 IT に就職することで、IT の分野で救急救命士の知識や技術が生かせるという自らの経験について講演して頂いた。

7. 宮永 彩加（日本医科大学多摩永山病院）救急救命士資格を有する看護師の役割

救急救命士取得後、看護学校に進学することで、救急救命士・看護師という2つの資格を生かせるという自らの経験について講演して頂いた。

8. 小澤 貴裕（一般社団法人ファーストエイド）CPR トレーニングボトルの開発と、心肺蘇生法普及啓発の新たな取り組み

ペットボトルを使った心肺蘇生法の確立や、建物内での急変時対応システムの構築など救急救命士として民間で活躍している具体的な内容について講演して頂いた。

9. 大島 健太郎（東京消防庁）国家試験合格を目指した勉強会「大島組」

国家試験受験に向けて、グループ学習をすることで学力の差に関係なく相乗効果があることが明らかになった。

口演 1-1

齊藤千真（日本体育大学保健医療学部救急医療学科 4 年）

「部活動の顧問や生徒のニーズに合わせたファーストエイドコースの作成とその有効性」

抄録

【背景】平成 29 年度の調査では学校管理下で 47 名が死亡している。そして学校管理下の負傷事故のうち約半数が運動部活中に発生している。さらに、現場でのニーズが反映されていないことが多く、現場のニーズを調査する。加えて現状のファーストエイドのコースは決まった形を提供しているのみだが、競技特有の怪我や疾病があり、現場のニーズに合わせた形のファーストエイドコースは少ない。【目的】部活動の顧問や生徒に対して、それぞれのニーズに合ったファーストエイドコースを作成、開催することによって万が一の事故や疾病に対応する為の知識と技術を習得してもらう。【対象】日本体育大学の学友会所属部活動の選手、顧問、コーチ(1000 名程度)。【結果予測】現場にはそれぞれのニーズがあり、そのニーズに応える講習会を開催することで緊急時対応ができるようになる。現場で対応が可能になることで死亡件数が減ることを期待している。

発表を終えて

私はスポーツで発生する怪我や疾病を未然に防ぐことや、発生した際に適切に対応できることを目標として本研究を始めることになりました。その途中経過を皆様に聴講して頂き、とても良い機会になりました。皆様からの意見や指摘を頂き、研究のさらなる発展に繋がりたいと思いました。

また、プレゼンテーションの難しさを学びました。話したいことが多くある中、端的にかつ分かりやすく伝える為、試行錯誤しました。その経験を将来、救急救命士として傷病者と向き合う時に活かせたらと思います。

このような機会を与えてくださった中澤先生をはじめとする多くの先生方、ご来場くださった皆様に感謝をしています。ありがとうございました。



口演 1-2

高橋治花（日本体育大学保健医療学部救急医療学科 2 年）

「NGO First Aid 講習会の報告」

抄録

[背景] NGO 団体の方を対象に安全基準ガイドラインを作られている JaNISS さんからのオファーを受け開催した。[方法] NGO 職員合計 31 人に対してファーストエイドの講習を行い、ワークショップにて問題点を抽出した。[結果] NGO で緊急用のマニュアルはあるのかという点に対して、ある団体もあれば、ない団体もあることや、国内オフィスで働いている職員は、マニュアル全く把握していないことなどの問題点があがった。そして、海外での CPR は実施可能かという点に対して、日本とは状況が違い、救急車が来るとは限らないので搬送手段がわからないという問題が出た。[結語] ファーストエイドに対しての必要性が高いが応急手当の認知が低い。なので、現地の状況を知ったまた、理解した上での講習会の開催をすべきである。

発表を終えて

私は昨年の夏にカンボジアでボランティア活動をした経験から、国際医療に興味があり、今回の講習会を担当しました。実際に国によって状況が異なることから、その国・地域の文化や慣習を十分理解した上でのファーストエイドが必要になると改めて感じました。そして、今回が第 1 回目の講習会であったため多くの改善点が出てきたため、これらのことを生かし、2回3回と継続した講習会を開催したいと思いました。



口演 1-3

栗屋天翔（日本体育大学保健医療学部救急医療学科 2 年）

「米国シアトル救急車同乗実習の効果」

抄録

【背景】日本体育大学の救急救命士養成過程の学科では 2016 年より米国シアトル救急車同乗実習を行っている。大学内で選抜試験を行い 2016 年は 12 名、2017 年は 16 名、2018 年は 16 名の学生が参加した。

【目的】米国シアトル救急車同乗実習の効果を検討した。

【対象】日本体育大学救急医療サークルの 2～4 年生 30 名

【方法】米国シアトル救急車同乗実習に参加した学生 14 名（以下参加群）と、救急医療を学ぶサークルに所属し同乗実習に参加したことがない学生 16 名（以下非参加群）に分けてアンケート調査を実施した。

【結果】両群興味が高かった項目としては、救急医療に興味があるかなどで見られた。また、海外の救急に興味があるかに関しては、参加群のほとんどで興味があるとの回答を得た。さらに、2018 年同乗実習前と実習後で国家試験模試の点数が平均 24.9 点上がっており、参加群のほとんどが、この実習が、将来の方向性を決めるきっかけとなったと答えた。

【考察】米国シアトル救急車同乗実習により、国家試験や英語の勉強につながる可能性が示唆された。これは、現地のパラメディックの姿勢や行動に感銘を受けたと考えられる。今後、追跡調査を行い、さらなる効果を調査して行きたい。



口演 1-4

池田 匠（日本体育大学保健医療学部救急医療学科 2 年）

「実習の補講における意識改革」

抄録

【背景】シミュレーション1 の効果測定合格を目指して班員で話し合い、今の技術では合格が難しいと判断し、補講を行い技術を向上させることにした。【方法】班員にアンケートをとり、補講を行ったことにより、班員の授業に取り組み姿勢や意識の変化を調査した。【結果（補講実施後の意識の変化）】自分ができないところが明確にわかり、補講を行うことによって座学では学べないことを理解することにより自信に繋がったり、普段の授業を大切にすることがアンケートの答えが多かった。【結果②（今後の授業に対する取り組み）】1つ1つの授業を大切に考えながら受講する。また、わからないことがあればその場で理解するようにする、基本的な主義は一通りできるようになったので、後期の実習でも応用していきたいという結果が出た。【結語】今回は班員が一丸となって補講を行ったことにより効果測定の自信に繋がった。また、補講を行うことが大切なのではなく、日頃の授業前からの準備、授業中の姿勢を改善することにより知識や技術の向上につながると感じた。

発表を終えて

今回の発表は私にとって初めての発表でした。2年次から実技の授業が始まり、どれも必要な授業でした。補講を行ない授業前の準備をすることによって自信につながり効果測定でも高得点に近づくのではないかと思ったので、後輩たちにもこうしてほしいと思い今回の発表を行いました。ぜひ今回の発表を聞いて私達も後輩たちも以上を踏まえて取り組んでほしいと思います。



口演 1-5

宇田川美南（日本体育大学救急救命専門指導教員）

「救急救命士の大学院進学」



抄録

今年度、保健医療学部に大学院が設立された。私自身も大学院に進学した救急救命士の一人であるため、救急救命士が大学院に進学する意義について自信の経験を交えて発表をした。

大学院とは学部より専門的で実践的な能力を身につけるために、大学で学んだ知識や理論を応用して学術的な研究を行う教育機関である。具体的に「研究」「臨床」「教育」の3本柱のもと様々な経験をしてきた。私は保健体育教員免許と救急救命士の国家資格を保有しているため、教育現場の危機管理体制について勉強し、「教育現場での児童生徒の死亡事故を減らせるように」研究を行っていた。また、日本医科大学多摩永山病院で勤務をしながら臨床経験を積んできた。大学生の授業補助(Teaching Assistant)では、実習班を担当し救急救命士として指導、教育を行ってきた。この経験こそが今の私の原点であり、大学院は教員になりたいという夢を叶えるためのステージとなった。救急救命士が大学院に進学すると救急救命士という国家資格に、「知識」「技術」「経験」がプラスされワンランク上の救急救命士になることができると考える。そして大学院は研究者として、教育者として、救急救命士としてのステップアップの場であり、その全てが傷病者のために繋がるのである。

発表を終えて

この度はこのような機会を与えてくださりありがとうございました。

私にとって大学院は、今の私を作ってくれた場所です。また「自分の言葉で直接的に教育・指導を行いたい、教員になりたい」という夢を抱かせてくれた場所でもあります。そして大学院に進学していなかったら、私は今この環境にいなかったと思います。私が大学院に進学しようと思った背景や、大学院で経験してきたことを発表させていただいたことで、少しでも大学院に興味関心のある学生が増えてくれたら嬉しいです。5分では話しきれなかったこともありますので、気になる方はどんどん聞きに来てください！

口演 1-6

西本好希（NTTグループ 日本情報通信株式会社【NI+C】）

「IT企業で働く救急救命士」



抄録

救急救命士国家資格を最大限に活かすことのできる場合は消防機関に所属している救急隊であり、民間企業で活用することは難しい。救急救命士免許は主に、消防機関に所属している救急隊員が活用する資格だからである。救急救命士の新たな可能性をIT企業に所属する救急救命士の立場から発表させていただいた。

はじめに私の紹介を簡単にさせていただく。

2017年4月、第40回救急救命士国家試験に合格し救急救命士となる。2018年4月、NTTグループである、日本情報通信株式会社【NI+C】に入社。日本電信電話株式会社(NTT)と日本アイ・ビー・エム株式会社(日本IBM)の合弁会社である弊社で名刺に「救急救命士/EMT」と記載し営業活動を行う。現在、大手企業を中心としたお客様に対し、NTTとIBMの世界最先端技術を駆使しITソリューションを提供している。資格を取得するうえで培ってきた知識と経験を活かして、日本、世界の救急医療やビジネスへの貢献を目指している。企業訪問先で名刺交換をする際、高確率で救急救命士について触れられることが多く、世間へ救急救命士の認知度を高めることにも繋がっている。今後は多くの企業との協業も視野に、救急医療に関連したソリューションの提案もしていきたい。

消防機関に所属する救急救命士でなくても、救急救命士として活躍ができる場があるということを皆様にお伝えしたい。しかし、強い意志と目標がなければ活躍することは難しいだろう。なぜならば、組織の人間として活動するには様々な制約があるため、周りを説得し納得させていかなければならないからだ。救急救命士という国家資格を活かすか腐らせるかは、すべて自分次第である。

発表を終えて

今回、個人としてではなく、日本情報通信株式会社【NI+C】に所属する救急救命士として登壇させていただきました。医師や看護師は厚生労働省等の行政機関や企業において、技官や産業医等として活躍の場が設けられていますが、救急救命士には、そのような活躍の場はあまり多くないと感じています。救急救命士というと、消防機関に就職するという考えが強いというのが事実です。今回、その突破口として、口演をさせていただいたこと、中澤真弓 准教授をはじめとするスタッフの皆様にご心から感謝申し上げます。今後も、救急救命士として日本、世界の救急医療やビジネスに貢献していきたいと思っております。

口演 1-7

宮永彩加（日本医科大学多摩永山病院）

「救急救命士資格を有する看護師の役割」

抄録

大学で救急救命士の資格取得後、看護専門学校へ進学し看護師の資格を取得した。その後、医療機関へ就職し、救命救急センターへ配属された。「看護師」とは厚生労働大臣の免許を受けて、傷病者もしくはじょく婦に対する療養上の世話または診療の補助を行うことを業とする者をいう（保健師助産師看護師法第五条）。

実際、救命救急センターでは入院患者の患者の受け持ちをする。具体的な業務は、バイタルサインの測定・全身観察・清潔ケア・口腔ケア・体位変換・異常の早期発見・離床などがある。そのほか、救命救急センターでのステップアップ、救急救命士から看護師になって思ったこと、救急救命士資格を持つ看護師の役割などについて発表した。



口演 1-8

小澤貴裕（非営利型一般社団法人 ファストエイド）

「CPR トレーニングボトルの開発と、心肺蘇生法普及啓発の新たな取り組み」

抄録

救急隊員の現場到着時の CPR の実施率は向上しつつあるが、国内地域での 10 年間平均を確認すると最大の地域でも 20 パーセントには到達しない。この理由には現場での初期の CPR をうまく教育できておらず、AED による除細動にばかり注目が集まり過ぎる傾向があると考えられる。CPR がされない事で初期の除細動に失敗する事は包括的除細動の実施以前によく観察されていた。

非営利型一般社団法人ファストエイドでは消防機関での講習に準じた、ファーストタッチの短時間救命講習プログラムを開発した。また、この講習に使用する資格認定の仕組みを構築した。このコースの修了者に資格証を発行し、救命講習や医療従事者が事前登録できる iPhone 共助救命アプリ「Coaido119」への登録を可能とした。また、訓練では専用の自宅持ち帰り型のキットを製作して配布を行い使用し、自宅学習や家族への伝達を可能とし、繰り返し自律学習可能な動画を開発した。このキットは年間 7 億本販売されている空きペットボトルを組み合わせることで再使用を可能とし、CPR の一般的認知度向上を狙っている。胸骨圧迫が救急隊員の現場到着時間までの重要臓器血流維持を保つ事は周知の事実であるが、4 割の事例では CPR が行われていない。この状況改善に寄与する仕組みについて、発表した。



口演 1-9

大島健太郎（日本体育大学保健医療学部救急医療学科卒業生）

「国家試験合格を目指した勉強会『大島組』」

抄録

救急救命士国家試験合格に向けて4年生の10月から本格的に勉強を始めた成績の良くなかった学生が合格してサクセスストーリーを発表した。

「学生生活にて部活、遊びを優先」「勉強の仕方がわからない」「1人で勉強してもモチベーションが保てない」と三拍子揃った学生たちが半年で得点を約2倍にした。勉強は自分のためだけでなく、仲間のためでもあるという意識を持って実施した。自分の為だけでは、モチベーション低下時に限界があるが、他人の為と思えば自分が辛くても逃げられないという結果につながった。

この話を聞いて、後輩たちが今以上に勉強に力を入れて、国家試験合格はもとより、さらに高みを目指して勉強しようと思って頂けるようになったら幸いです。



口演 2 災害に立ち向かう

助言者：原田 諭（救急救命専門指導教員）

災害は、人為的な要因や気象的な要因など多岐にわたる。今回の口演では本学の学生だけでなく、様々な分野の方々から発表があり、多面的な角度から災害について研究発表が行われたと考えられた。

内容は大きく4つに分かれており、1つ目は災害時に対する自助・共助の必要性だった。若い力から地域の防災力向上を目指すべく、学生消防団員の意識調査を行うことや、過去の災害を振り返り、公助に頼るだけでなく、ボランティアを通じて地域の力で対応する必要性が考えられた。また、今年発生した「平成30年7月豪雨」後にもボランティア対応を行い、現地の被害状況の確認、ニーズの調査及び拠点や活動中の注意点を初動で調査するなど迅速な対応も垣間見ることができた。

2つ目は救護対応の症例報告であった。本学科では、マラソン大会の救護活動や今回の花火大会など多数の救護活動に参加させていただいている。学生は常日頃から「今私たちにできること」として、一般市民の方に向けたファーストエイドの講習会にスタッフとして積極的に参加を行っている。このような救護活動を行うことにより、来場者の方々へ安心を届けられていると感じた。

3つ目は災害医療関係の活動であった。医療圏内での定例会議や各種訓練など医療圏が一致団結した活動を行うことにより、より質の高い災害医療が提供されていると感じた。また、本学においても学生のロジスティクス研修において、講義や避難所アセスメント・クロノロジーの実習など質の高い研修を行っており、後方支援の重要性を感じた。実際に「平成30年7月豪雨」の中でクロノロジーを行った本学大学院生は、リアルタイムでのクロノロジー入力の困難さを感じ、写真挿入のクロノロジーが少なかったことなど課題も多かったと述べていた。

4つ目は気象に関することであった。気象は生活する上で切り離せない要因である。地震や台風など様々な気象要因があるが、今回は熱中症に関する内容で発表された。熱中症搬送者数が増加している近年において、大変参考になる発表であったと感じた。

以上、様々な内容の発表であったが、多種・多様にわたる災害に「立ち向かう」ためには、研究や活動を繰り返し行い、日頃から災害に対する意識を高く持つ必要性があり、自助と共助の力を更に向上させることが重要であると感じた。

この度の平成30年7月豪雨において被災されました皆様方に心からご冥福とお見舞いを申し上げますと共に、皆様方の安心・安全と1日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

口演 2-1

川邊貴大（日本体育大学保健医療学部救急医療学科 4 年）

「学生消防団員の意識調査」

抄録

【背景】全国で消防団員数は減少傾向にある。その要因とされているのは「サラリーマンの増加」「ライフスタイルの変化」などの社会的要因があげられる。そこで社会に出る前の学生を対象とした調査を行った。【目的】卒業研究で行うアンケートを作成するための、パイロットテストを行う。【対象】消防団加入者の 18 歳以上かつ大学生、専門学生、その他の学校に在籍するもの。【方法】山口市消防団に記述式のアンケートを実施した。【結果】対象は 22 人で回収率は 88%（n=18）であった。入団したきっかけとしてあげられたのは、学校での説明会が延べ 12 人であった。入団前に不安があったかという問いに対しては、18 人中 5 人が（うち女性 3 名）不安があると答え、入団後 5 人中 4 人は不安が解消したと答えた。内容は女性が「女性が少ないことへの不安」があげられた。入団してよかったこととしては、「知識や技術が身付く」が最多で「地域交流ができる」という意見もあげられた。今の社会に消防団は適合しているかという問いに対しては、適合しているが 15 人、適合していないが 2 人という回答であった。今後も消防団を続けていきたいかという問いに対しては、続けていきたいという人が 12 人、続けていきたくない人が 6 人という回答であった。続けていきたい人の中にも、続けていくのに不安があるという回答もあった。

発表を終えて

私が消防団員減少が問題化していると気づいたのが今年に入ってからであり、それくらい学生間での注目が低いと感じた。そこで学生が消防団に対してどのようなイメージを持っているのかというのを調査して今後の消防団員促進活動に役立てたいと考えました。

今回初めてこのような場で発表させていただき、とてもいい経験になりました。今後行う卒業研究では、今回いただいた意見や反省点を踏まえ、より良いものとしていきたいと思えます。



口演 2-2

岡野透（日本体育大学保健医療学部救急医療学科 4 年）

「過去の災害から見る自助・共助」

抄録

平成 30 年 6 月 28 日から 7 月 8 日にかけて発生した平成 30 年 7 月豪雨災害で被災した広島県三原市本郷町船木・岡山県倉敷市でのボランティア活動についての報告。

現地では一階が完全に水没してしまったお宅や地元を離れたくない方、被災地の方は「まさか、避難所で生活をする事になるとは」「被災者の気持ちがわかった」「空っぽになっていく家を見ると虚しくなる」などのお話をされていた。

今回のボランティアでは日本レスキューボランティアセンターの方や世田谷ボランティア協会の方々と活動し清掃や用水路の確保作業を行った。

ボランティアとは二つの支援の仕方がある。一つ目は生活をするうえで困っていることの支援。二つ目は被災地のことを思い二回目三回目と現地を訪れる事である。被災した人々が一番悲しいことは「現地であった事が忘れ去られてしまうことである」そこで私達ができる事とは継続した支援やプロボノになることなどがある。そして、ボランティアとして最も大切なことは「現地であったことを忘れずに助けた方々の今後を考え人々に寄り添うこと」これは、ボランティアとしてだけでなく救急救命士としても必要なことである。

現地であったことを多くの人に知ってもらい今後も支援を続けていく必要がある。

発表を終えて

私は 4 日間、広島県・岡山県でボランティア活動を行いました。帰宅した時に被災地と何も変わらない日常に感じるものがありました。もっと被災地で起こっていることを多くの人に知ってもらいたいと強く思うようになりました。そして、過去日本を襲った災害から学び自助を高め、正常性バイアスを減らしていけるよう研究に励み、継続した支援を行うべきだと感じました。



口演 2-3

小玉響平（日本体育大学保健医療学部 救急医療学科 4年）

「本学の学生を対象としたロジスティクス研修の実施について」

抄録

【背景】近年、地震や豪雨などの災害が発生し、一般市民の災害への意識が高くなっている。

【目的】救急救命士養成課程の学生に対しロジスティクス研修の実施を検討した。【対象・方法】災害医学を履修中の救急救命士養成課程の学生 92 名を対象とした。90 分の講習時間内で情報管理（避難所アセスメントとクロノロジー）の実習を行った。講習の実施前後で情報管理についてのアンケート調査を行った。【結果】履修者 92 名中 82 名 (89.1%) から有効回答を得た (n=82)。クロノロジーを行う自信について、「とても自信がある」、「自信がある」という回答が実施前で 5 名 (6.1%)、実施後で 17 名 (20.7%) と増加を認めた (p=0.012)。避難所アセスメントの自信についても、3 名 (3.7%) から 15 名 (20.7%) に増加を認めた (p=0.002)。【考察・結語】本講習実施前後でのアンケート (n=82) で、避難所アセスメント (p=0.002) とクロノロジー (p=0.012) を実施できるかどうかの自信において、優位な差が認められた。しかし、情報管理の正確性が得られなかった。事前事後のアンケート結果で「どちらともいえない」と回答した割合が約 50% を占めていた。今後は事前学習や複数回に分けて研修を行う必要があると示唆された。

発表を終えて

今回、私は学生に対し、ロジスティクス研修を実施するという「挑戦」をした。今まで、様々な講習会で発表してきたが、今回の研究会のような学会形式の発表は初めてでありとても緊張した。さらに学生統括、学生座長を務め貴重な経験ができた。また、今回の研究会に参加し、新たな救急救命士の可能性について学ぶことができ、視野が広がった。今後はこの経験を活かし、来年以降もこの研究会に参加したいと強く思う。



口演 2-4

郡 愛 (日本体育大学保健医療学部救急医療学科 3年)

「小田原酒匂川花火大会の救護対応」



抄録

【背景】平成30年8月4日に開催された小田原市の酒匂川花火大会の救護を体験し感じたこと、今後の課題についてまとめた。【症例報告】70代・男性 めまいを訴え小田原駅前で倒れているところを通行人が発見。帰宅途中の日本体育大学の救護班が遭遇し救護対応。【考察】①医療従事者を目指し、学ぶ学生として、めまいの傷病者に対する対応の評価。②質の高いバイスタンダーによるファーストエイドの効果。また、今後できる活動として、なにが考えられるか。【結果】①めまいの対応として、「改訂第9版救急救命士標準テキスト」から、観察による症状増悪に注意しながら、めまいの性質を確認し、随伴症状の有無・眼振の確認に加えて鼻指鼻試験を実施し小脳半球の機能を観察する。②CPA時の口頭指導の制度が導入されてからの一か月生存率の上昇があった。という結果が得られた論文。脳卒中評価システムの訓練による症状判断率の上昇という結果が得られた論文。この二つの論文から質の高いファーストエイドが「傷病者の予後に関わること・バイスタンダーの教育が質の高いファーストエイドに効果があることを示唆する。【結語】今回の救護対応は授業では体験することのできない実際の傷病者に対応することで学びをより一層深めることができた。傷病者に一番に接触する人が医療に関する知識があることで救急隊の活動負担の軽減や、傷病者の予後に期待できるが分かった。今後自分達にできることとしては、自分自身の質の向上はもちろんだが、一般の方に向けたファーストエイドの講習会や講演会の積極的な開催とスタッフとしての参加であると考えている。

発表を終えて

私たちは普段から、授業で「シミュレーション」というかたちで実習を行っています。そこでは体験できない実際の傷病者の対応はとても勉強になりました。また夜の暗く暑い中での対応は自分自身の体調管理も大切であることを改めて感じさせられました。自分の行った救護活動を振り返ることで今後の課題を見つけることができました。人前で自分の意見を述べることは、緊張もしますが、自信を持って堂々と発表することが大切だと思います。自信を持って発表するためには、しっかりと調査し、練習することしかないと思います。貴重な体験をさせていただくことができました。また、普段聞くことのできない先生方の熱い想いや、色々な職種の方々のお話も聞くことができ、勉強のモチベーションに繋がり、将来のことを考える良い機会となりました。

口演 2-5

須賀涼太郎（日本体育大学保健医療学部救急医療学科助手）

「呉市豪雨災害ボランティア活動報告」

抄録

【背景】平成30年6月28日～7月8日頃にかけて、西日本を中心に台風7号および梅雨前線が影響し氾濫や浸水、土砂災害が発生した。広島県呉市では、死傷者46名と大きな被害となった。【目的】ボランティア活動における初動調査の役割を調査した。【方法】7月15日～7月16日（視察団）、8月13日～8月15日（第二弾）の二回に分けて、呉市のボランティア活動を行った。視察団は現地の被害状況の確認やニーズの調査、活動中の注意点の確認を行なった。【結果】泥や瓦礫の撤去作業となることが予想されたため、服装を指定し、安全管理を徹底することで、けが人が出ることなく活動することができた。

【結論】視察団がボランティアニーズを確認することで、安全確認を確実に行うことができた。

発表を終えて

初めに、震災に被災された方々には心からお見舞い申し上げます。共に復興に尽力されている皆様には安全に留意され、ご活躍されることをお祈りいたします。

ボランティア活動を行い一番に感じたことが、人手が足りないことです。ボランティア活動が多く行われていた時期に私はそう感じました。豪雨災害が発生してから二ヶ月以上の月日が経過したが、いまだに手つかずの場所が多いのが現状です。呉市に限らず、私に行える範囲で支援活動を続けていきたいと考えております。



口演 2-6

北野信之介

(日本体育大学保健医療学研究科保健医療学専攻救急災害医療学コース1年)

「平成30年7月豪雨の活動を通して考えるロジスティクスの業務改善」

抄録

【背景】平成30年7月豪雨災害に対し、特定非営利活動法人ジャパンハート国際緊急救援として愛媛県で、認定特定非営利活動法人災害人道医療支援会として岡山県倉敷市で、日本体育大学として広島県呉市で災害支援活動をした。活動の際の職種は全てロジスティクスであった。各組織でのクロノロジーを比較検討し、最善の方法を検討した。【方法】日本体育大学で行なっているGoogleフォームを用いた方法(以下:webノロ)に写真添付を加えた。日体大呉市災害ボランティアで導入し検討した。【結果】リアルタイムでwebノロを記入できなかった。写真挿入のwebノロが少なかった。【考察】本活動では、学生が活動中に携帯端末の使用ができなかったことと写真撮影することができなかったことが本結果の原因になったと考えられる。【結論】webノロに写真挿入する方法が期待され、日体大呉市災害ボランティアで試験導入したが、愛媛県と岡山県での活動状況と大きく異なったため、検証が困難であった。今後は、ロジスティクス訓練などで効果について検証していきたい。

発表を終えて

1つの災害に対して3つの組織で活動することは貴重な経験だと考えたため、以前から効率や正確性について興味を持っていたクロノロジーに関して検証した。本災害支援では明確に検証することができなかったため、今後もクロノロジーに関する研究を進めていきたい。救命蘇生研究会の第1回で発表できたことを光栄に思います。



口演 2-7

井上将仁（東京医科大学八王子医療センター 救命救急センター）

「南多摩保健医療圏災害医療ワーキンググループの活動」

抄録

【はじめに】南多摩保健医療圏は八王子市、町田市、日野市、多摩市、稲城市の5市で構成される二次保健医療圏である。当圏域で大規模災害が発生した際に防ぎ得た災害死をなくすため、2015年に災害医療ワーキンググループ（以下WG）を立ち上げた。【活動概要】WGは月1回の会議をベースに医療圏内の災害医療関係者が有志で参加し、各種訓練・講習会等の企画を行っている。【方法】WGの実績を明確化すべく、WG実績一覧及び会議議事録を参考に活動内容を抽出した。更に活動回数の多い会議と訓練について、その内容を細分類した。対象期間は平成27年4月から平成30年3月とした。【結果】計192回の活動があった。会議回数が105回と最多であり、企画立案や連絡調整に関する議題が大半を占めた。次いで訓練の企画・支援が45回であり、各訓練の支援や通信訓練・図上訓練等の企画が多い。【考察】継続した活動の結果、各病院の災害医療に対する関心や知識の向上に繋がり、医療圏内で各種訓練等の相談役や調整・サポート役としての役割を担うことができた。【結語】医療圏の災害医療体制を強化する上でWGは効果的な存在になりつつある。今後はより効果的に各種訓練の企画ができるよう手順をパッケージ化し、誰もが使用できる手引書を作成する必要がある。このような医療圏単位での活動は全国的に珍しく、東京都からも注目をされており、今後も継続的な活動が求められる。

発表を終えて

南多摩医療圏災害ワーキンググループについて多くの方々に活動を知っていただき、いずれ他の医療圏のモデルとなることで、南多摩医療圏やその他の医療圏においても、災害等で被災地域から防ぎえた災害死が全国的に無くなっていけば幸いです。

また、このような発表は初めての挑戦で、とても緊張しましたが、発表に向け多くの方にサポートしていただき発表することができ、貴重な経験になりました。今回の発表を機に様々なことに挑戦していきたいと思えます。



口演 2-8

坂田健吾（日本体育大学救急救命専門指導教員）

「気温データより救急出場件数が予測できるか～埼玉県における検討～」

抄録

【背景】近年、世界的に地球温暖化が問題となっている。日本でも平均気温は1898年以降の100年間あたりで約1.1℃上昇し、1990年以降は高温を示す年が多く、日本の平均気温上昇は世界の平均に比べても大きくなっている。日本の中でも埼玉県は南部がヒートアイランド現象により、北部は盆地地形や秩父の山岳部からのフェーン現象により高気温を示す。同じ県内でも高気温となる理由が異なっている。【目的】救急救命士の消防における現場活動は大切であるが、傷病者の発生を予防することも重要である。そこで気象情報から傷病者の発生を検討する。【方法】対象期間は2013, 2014年の7月から9月。対象地域を埼玉県全体、さいたま市及び熊谷市とし、日最高気温、日最高WBGT及予想最高気温と急病による救急搬送件数の相関を確認。また、さいたま市と熊谷市においては、高齢者を対象として相関を確認した。更に、時間ごとの気温変化と急病による救急搬送件数の増減を確認した。【結果】埼玉県全体では日最高気温及び日最高WBGTは、7, 8月に相関が確認され。また、さいたま市は7月に、日最高気温、日最高WBGT及び予想最高気温に相関が確認された。高齢者にあつては、さいたま市及び熊谷市共に全体と比べると相関が弱くなることが確認された。気温の変化と救急出場件数の増減においては、総務省消防庁が発表している救急出場件数増加する時間帯と重複していた。

発表を終えて

気象情報による救急出場件数が増加する報告はある。今後、更なる地球温暖化の影響により、今年のような高気温が続くことが懸念されると共に、今後も救急出場件数が増加することが予想されている中、これから消防機関などに入職する学生には、是非とも救急講習会などで、熱中症予防なども積極的に広げて頂きたいです。

また、発表に伴い、学生からの積極的な質問を頂きたいです。



口演 2-9

服部充宏（一般財団法人日本気象協会）

「気象」と「熱中症」



抄録

【背景】近年、我が国における夏期の高温は多くの熱中症の要因となっており、多くの救急搬送者が発生していると考えられる。これまで、様々な機関において夏期の熱中症に対する事前の対応が必要であると考え、取り組みが行われてきた。今後、熱中症の発生を分析しより効果的な対策や予想を目指して、熱中症発症の状況と気象データを収集し分析を進めることを計画している。【既存の研究】これまで、熱中症の研究が多くなされてきた。特に熱中症の指標に関しては、WBGT 式が多く利用されている。WBGT 式は P. Yaglou ら¹によって開発され、改良が重ねられてきた。わが国では、持田ら²による P, Yaglou らの研究に関する疑問点を踏まえた式の改良や、小野ら³による通常気象観測項目による WBGT 式の推定などが行われてきた。【今後の取り組み】熱中症の発生データと気象データを分析し熱中症の発生を説明するために効果的な指標の研究を行う予定である。詳しく気象要素と熱中症の関係を分析するため、発症時点の気象状況や、発症までの変化量等、特別値に着目した検討が有効であると考えられる。また、市区町村毎の人の移動や密集度などを考慮した分析が効果的であることが見込まれる。

発表を終えて

この先、データ収集と分析を進める予定となっております。これまで気象に関する分析を進めてきましたが、今後は救急データに関する分析について、データの特性を踏まえた分析や現場での利用を考えた指数の検討が必要となることが予想されます。救命蘇生研究会において、救急搬送に関する専門家の皆様とお会いし、データ収集や分析の方向性に関してご意見をいただいたことで今後の分析や研究開発がさらに有用なものになると考えております。

¹ Yaglou, C.P. and Minard, D. (1957): Control of Heat Casualties at Military Training Centers, American Medical Association Archives of Industrial Health, Vol. 16: 302-316.

² 持田 徹, 佐古井智紀 (2011) : WBGT 指標の科学. 日生気誌, 48: 103-110.

³ 小野雅司, 登内道彦 (2014) : 通常観測気象要素を用いた WBGT (湿球黒球温度) の推定. 日生気誌, 50: 147-157.

口演 3 医療従事者として

助言者：小倉勝弘（救急救命専門指導教員）



本演題については、他の演題と異なり、全て学生のみで構成されたものであった。学生については1、2年次ということもあり、学会発表などを聴講経験者が少なく、経験不足は否めなかったが、他の誰よりも努力をし、良い発表にしたいという熱意は演題募集時から伝わってきたのが教員として非常に嬉しかった。

発表内容については、街中や学内における救護現場での対応、各種イベントでの救護活動、学内や学外での実習など幅広く、また、学生が素直に感じたことを来場者に「共感」していただけたのではないかと考える。スライドについては、学生自らが構成し、各教員の確認や助言を得てブラッシュアップを図っていく学生が多かった。冒頭にも述べたように、作成・構成についても経験不足は垣間見えたが、時間を惜しまず、自らの率直な思いを必死で伝えるように努力している姿は、非常に感銘を受けた。

しかし、壇上での表現方法や態度など、日体大の学生として未熟なところも散見され、壇上に立つ者としての立ち振る舞いなど、我々教員としての指導不足もあったと反省をしている。今後は、発表演題だけでなく、発表者としての姿勢なども指導・教育体制を充実させていかななくてはならない。

本研究会については、次回開催を見越した動きは既に始まっており、今回学生たちが経験したものは、あらゆる場面で活かされてくると確信をしている。また、必死になって発表する姿などを見て、次は自分も参加したい、発表をしてみたいと思った学生は多くいるのではないか。研究会のブラッシュアップを図りつつ、日体大の救急医療学科が他の模範となるべく姿になっていくよう、教職員・学生が一体となって、「挑戦」の心を忘れずに邁進することを切に願って総括とする。

口演 3-1

阿部雅治（日本体育大学保健医療学部救急医療学科 2 年）

「車と自動二輪車の接触事故について」

抄録

【発見】道の途中で目に入ったのはバイクが道に転がり傷病者が横に倒れているところであった。車は道路の真ん中に停車している状況であった。【行った事】エンジンの部分と道路の地面にオイル漏れがないかを目視して安全が確認することができた。この時にバイクの破損状況も確認した。傷病者は仰臥位に倒れていた。傷病者が首を動かさないように足側から近づき頭部保持に入った。意識があるのを確認できたため動かないように伝えた。傷病者は仰臥位に倒れていた。傷病者が首を動かさないように足側から近づき頭部保持に入った。意識があるのを確認できたため動かないように伝えた。GUMBA は救急隊が到着したためとることができなかった。意識はクリアであったが、話しかけるのを止めてしまうと下がりそうであったため話しかけることを継続した。救急隊が到着し、先に頭部保持を隊長と交代した。隊長に傷病者のこれまでの状態を伝えそしてすぐにヘルメット離脱が行われた。その後全身観察が行われた。診断はされなかった。その後搬送準備が始まりバックボードによる搬送に決まった。傷病者の体を持ち上げ、下方からバックボードを入れることになり私はバックボードを入れてほしいと頼まれて一緒に行った。その後、簡単な固定を実施して車内収容された。

発表を終えて

実際に終わってみて感じたことは、今回はバイスタンダーが最終的には三人いたがもし一人の場合にはどんな動きの手順を行えばよかったのか気になった。一年前にこのような事に出会ったとしても何もできずに終わっていたと思う。サークルや授業のおかげで活動することができたのだと感じた。今となってはシミュレーションしていてよかったと感じた。今回の出来事は自分にとっていい経験になりました。この経験を活かしてこれからの救急の勉強に繋げていきたいです。



口演 3-2

伊藤彩奈（日本体育大学保健医療学部救急医療学科 2 年）

「小田原北條五代祭りの救護活動報告」

抄録

【活動概要】日時は平成30年5月3日（木・祝）12時から16時。場所は小田原城及び周辺地区。内容は傷病者発生時の応急手当の実施。【イベント概要】北條五代祭りとは、戦国大名北条氏を称える小田原市最大の観光イベントであり、本年の観光動員数は約22万人であった。【救護体制】消防本部現地警戒本部、救護本部は小田原城エリア内に設置され、救護スタッフ（定点スタッフ、モバイル隊）は市街地内で活動した。定点スタッフは、特に混雑すると予想されていたパレードコースの周辺に配置された。【救護活動】私たちはモバイル隊として活動し、4件の事案を対応した。接触時トリアージカテゴリーは、黄2件、緑1件、不明1件。場所はいずれも救護スタッフ配置エリア内で発生していた。【課題】①救護活動エリアに対し、救護スタッフ人数が少なかった為、救護スタッフの増員が必要である。②汚染された資機材に対応できるよう、予備資機材の管理場所を設けるなどの対策が必要である。【まとめ】対応した事案4件は全て混雑が予想された場所で発生しており、定点スタッフの配置は有効であった。また、学生がイベント救護に参加することで、授業では経験できない実際の現場を知ることができた。

発表を終えて

今回、私が報告した救護活動は、本学からの参加人数が3名（学生2名、教員1名）と少ない活動だったので、このような場で発表することで、参加していない学生や沢山の方々に知っていただくことができとても良い経験となりました。学生は何かを発表する機会がなかなかないので、これからはこの研究会が発表の場となるのが嬉しいです。来年も発表に挑戦できたら良いなと思います。



口演 3-3

伊藤俊孝（日本体育大学保健医療学部救急医療学科 2 年）

「青葉台駅における過換気症候群の女性の対応について」

抄録

【概要】 5月8日 朝8:30頃 青葉台駅ホームにて苦しそうにしている女性を発見。
すでに学生二人と駅員が対応していたので、現病歴を聴取、鈴木准教授に電話で指示を仰ぐ。救急隊現場到着後、駅員から聴取した内容を引き継いだ。

【良かった点】

無理をせず鈴木准教授に頼った。

1年生の女子学生2人が協力してくれたこと、女性に対して声がけをしてくれていた。
バイタルを正確にとれた。

女性に対する衆人環境を考え、駅の救護所に搬送できた。

観察するときに理由と触る部位を傷病者本人に伝えながら観察ができた。

【改善できた点】

自分で確実に判断できるようにならなければいけない。

傷病者の安静な体位を維持しつつ、観察しやすい体位にできたのではないかな。

本人から聴取できた情報がまだあった（SAMPLE または GUMBA）。

声かけの方法を工夫することでメンタル的なフォローもできたのではないかな。

駅員の協力をもっと得られたのではないかな。



口演 3-4

池沢 司（日本体育大学保健医療学部救急医療学科 2年）

「保健医療学部での学びを通じて～浜での症例報告～」

抄録

【背景】救急医療とライフセービング活動には密接な関係がある。人命を救う、守る活動ライフセービングとの関わりについて。【方法・内容】実際に夏場監視活動を行っている千葉県白浜の根本、名倉、塩浦海水浴場を対象としている。

内容としては今年の夏場に起こった対応事案、浜の紹介、陸上とは違う水辺における怪我となっている。今回取り上げた一つの意識障害のある熱中症疑いの方については意識レベルが落ちるといった事もあり、対応については今後にも課題が非常によく見えたと感じている。救急隊を呼ぶ必要性についても考えさせられた。他にも波にのまれて出血や擦過傷下腿部の骨折疑い等、陸上とは違う自然を相手にした怪我や症状等があり、自分達ライフセーバーには万が一の際に海から救助する能力、危機管理能力と共に怪我等に対する適切な処置を身に付けてなければならない。そこで本学科で学んだ事は非常に現場で使う事のできる学びであると強く感じている。【結論】スポーツ活動においても民間の人にも救命を普及させる事には大きなメリットがある。これこそが大学で学ぶ意義であり、社会貢献に繋がり、将来にも繋がる学びである。

発表を終えて

自分はライフセービング活動をしていて想像以上に水辺には危険があり、それに対応しなければならない事が多くあると感じています。

もっと一般の方にも救命に関する知識、技術を普及すればいいと考えています。

こういう場での発表をきっかけに沢山の方にライフセービングというものを知って頂き、本学科での学びを活かせる幅が大きくある事を感じて頂けていたら幸いです。

今後も文武両道頑張り、一人でも多くの人命を救います。



口演 3-5

緑川 亮（日本体育大学保健医療学部救急医療学科 2 年）

「一年次解剖見学実習を振り返って後輩に伝えたいこと」

抄録



【背景】日本体育大学では秋に解剖見学実習というすでに解剖の進んだご献体に触れる授業があります。【目的】この私の受けた解剖見学実習の反省を生かし、後輩に悔いのないような実習をしていただくためのものです。【先行研究】有意義に学習をしていただくために第21回日本臨床救急医学会総会・学術集会で発表された救急救命専門指導教員・吉田先生による解剖見学実習の事後調査を抜粋して記述します。対象は去年受講した生徒（平成29年度入学生）であり、方法はアンケート調査となっております。結果としては、実習における事前ガイダンスの有用性は、有用だったと思った方が96%でした。だが、実習時間（2時間）が短いと感じたり、またこの実習を受けたいと感じた生徒が過半数いたため、この短い時間を後悔なく過ごすにはどうしたらよいか、というのを同級生にインタビューしました。【対象と方法】対象は去年履修した生徒3名から個別のインタビュー方式をとり、「解剖見学実習の時間は足りないと感じたか、また、足りないと感じたならば、なぜ足りないと感じたのか」「もう一度行けるならばいきたいか」という質問のアンケートを行った。【結果】3名とも「時間が足りない、機会があるならば行きたい」と回答し、「1班の人数が多く観察しきれない、解説のある班とない班がある、各種臓器をきちんと観察するための時間がほしい、外傷学などの知識と解説を頂けるとてもよいと思う」などの各々の回答をいただいた。【考察】時間が短いと考察した理由は、事前ガイダンスで配られる資料を真面目に取り組んでいなく時間を使ってしまうのが一つと、臓器の名前を覚えているが場所を覚えていなかった、というのが考えられます。次に、また受けたいと考察した理由がもう一度受けることによってわからなかった部分やわかる部分の深い知識をつける。というのが考えられる。そして、インタビューの結果と総合し、次にあげる項目が事前学習に必要だと考えた。まずは、脳血管であり実習の際には実際に脳に触れる機会があると思うので、覚えてみてください。次にその臓器がどこにあるのかの把握です。事前に配られる資料や解剖学の教科書を参考にがんばってください。最後に膜構造です。いろいろな臓器を囲み区画の役割をしているので、ここを覚えることによってどこにその臓器があるかなどを覚えやすいと思います。【結語】実際に見ることによって考えが変わると思うので基礎をしっかりと固めたうえでこの必要と感じたところについて挑戦してみてください。

発表を終えて

私は、去年受講した解剖見学実習時に勉強不足をその時自覚し、今年受講される後輩に同じ後悔をしてほしくないために発表させていただきました。今回は研究会発表での初の発表となったためとても緊張しましたがとても良い経験になったと思います。今回の反省を生かし次回発表する際などにはより良い発表にしていきたい所存です。今回質問して下さった方や、発表の際に協力していただいた各先生方に感謝いたします。

口演 3-6

天野智仁（日本体育大学保健医療学部救急医療学科1年）

「傷病者に対する救護対応～頭部外傷・高齢者」

抄録

【概要】H. 30. 7 東京都内の道路で側臥位状態で倒れている傷病者を発見。近くに男性の方がおり、199 番通報をしている模様。【傷病者接触時】93 歳女性、加齢による老人性難聴。歩行中に転倒し頭部強打。バイタルサイン異常なし。左眉部に挫創 1cm 大と出血を認めた。【対応内容】名前、年齢を聴取。出血はガーゼで直接圧迫止血を実施。救急隊からの現場速報依頼の電話対応。血液を扱ったため、救急隊によるアルコール消毒。【高齢者の特徴】コミュニケーション力の低下、加齢による老人性難聴、疼痛の閾値上昇。【本来の対応】出血に対しては、ディスポーザブル手袋着用、なければビニール袋で代用。ガーゼによる直接圧迫止血。三角巾による頭部被覆。高齢者の対応としては、低い声でゆっくり話す、名前で呼ぶ、傾聴する、共感する。【結合】救急救命士養成課程の学生として、高齢者対応には困難があることを理解しておく必要がある。感染予防できるものを普段から持つておく。

発表を終えて

今回は、私が行った救護対応について発表させていただきました。1 番伝えたいことは、高齢者対応の困難、また感染予防の大切さです。実際に現場を体験することによって、いつもとは違う目線で見ることができました。この体験を通して感じたことなどを共に勉強している仲間と共有したく、発表させていただきました。

研究会での発表は初めてでしたが、私なりにリラックスできており、皆様に伝えたいことをしっかり伝えられたので、私の発表は大成功でした。

来年もまた機会がありましたら、発表の方させていただきたいと思います。

今回はありがとうございました。



口演 3-7

山田桃由(日本体育大学保健医療学部救急医療学科1年)

「海浜実習の活動報告」

抄録

【背景】近年、海浜での事故が多数発生している。【目的】救急救命士養成課程の学生に対し水難救助活動の実習の有効性について検証した。【方法】平成30年7月11日～7月14日に行われた野外活動実習履修者に対して事後アンケートを行った対象は救急医療学科野外活動実習履修者。【結果】水泳歴がない学生で人命救助が難しくないと感じた学生がいた($p < 0.05$)。海での人命救助は自然環境によって左右されるため難しいと感じると回答した者が全体の60%を超えた。2人での救助法より1人での救助法の方が難しいと感じると回答した者が多かった。「この実習は実際の現場で役に立つと思いますか」では60%以上が役立つと回答した。【考察】足が届く場所での実習が多かったため、水泳歴がない学生でも水難救助の困難さを感じなかった可能性がある。浮き具をつけていたため溺れない安心感があったからだと考えられる。海での救助活動に難しさを感じたのはその時の環境に合った救助法を瞬時に見極めて行うことが困難であったと考える。2人より1人の救助法が難しいと感じたのは、複数人で協力したほうが搬送するスピードや安定感があるからだと考える。【結語】救急救命士養成課程の学生に対し水難救助活動の実習の有効性はとてもあることが考えられた。

発表を終えて

私は、人生の中でこのような発表をしたことが初めてだったので不安や緊張がありましたがとても良い経験ができました。今後に繋げていきたいと思います。



口演 3-8

佐藤ゆずほ（日本体育大学保健医療学部救急医療学科 1 年）

「スパルタンレースの救護対応」

抄録

【背景】5月19日に開催されたスパルタンレースにて、言語・聴覚障がいをお持ちの傷病者に対して救護を実施した。今回の救護を通して”言語・聴覚に障がいを持つ傷病者が望む救護対応とは何だろうか？”という疑問をもった。【結果】言語・聴覚がい者にとって視覚からの情報はとても重要であり、口の動きを頼りにしていることが分かった。具体的に、お互いの眼や顔が見える位置に座ったり、空気感染や飛沫感染の恐れがない限り、マスクを外すなどの対策が必要だ。目線を合わせるという事は「気持ちを合わせる」という事にも繋がる。また、付き添いの人を中心とした対策を行わないという事が大切だ。その理由として、傷病者本人が不甲斐なさを感じたり、傷病者との直接的コミュニケーションを避けているような印象を与える場合があるからだ。コミュニケーション手段としては、言語・聴覚障がい者は医療従事者に手話でのコミュニケーションを求めている。一方で医療従事者は、言語・聴覚障がい者に対して、筆談を中心にコミュニケーションを取っており、ニーズに対応出来ていない現状がある。【結語】今回、私は救護で用いる最低限の手話だけでも勉強しておくべきだと思った。また、障がい者の方のボランティア等に参加しコミュニケーションの取り方を学びたいと思った。医療を提供していく上で医療従事者の障がい者に対する理解が重要であると感じた。

発表を終えて

今回、大勢の方々の目の前での発表は初めてで、とても良い経験になりました。発表時間が、5分と限られた中で、私の1番伝えたい事は何なのか、ここに重点を置き、簡潔にまとめる事はとても難しかったです。なかなか上手くいかない部分も沢山ありましたが、1年生のうちからこのような経験をさせていただく事ができ良かったです。このような機会を設けて頂きありがとうございました。



口演 3-9

篠田 櫻（日本体育大学保健医療学部救急医療学科1年）

「救助救命医療学演習の報告」

抄録

【目的】救急救命士養成課程の学生が将来の方向性を広げられるかを検証した。【対象・方法】救急医療学科1年生 78人 Google フォーム 講義に関するアンケート（内容）講義が勉強になったか・もっと詳しく知りたいことは何か・講義に関する感想【結果】アンケート対象者78人中51人から有効回答を得た。全ての講義において70%の学生がとても勉強になったと回答した。【考察・結語】医療機関・消防機関・海上保安庁・自衛隊・山岳の専門家の講演に対して学生全員が勉強になったと回答した。知識を深めることができ、職業に対して興味・関心を持った学生が多かった。現場の最前線で活躍されている方々の講演だからと考える。救助救命医療学演習の講演により将来の職業に対する選択肢が増え方向性が広げられた。

発表を終えて

今回、私は「救助救命医療学演習の報告」をした。初めての発表でとても緊張した。わからないことだらけで納得のいく発表ができなかったため、今回の発表だけでなくまた機会があればチャレンジしたいと思う。また、様々な先生や先輩方の貴重な発表を聞くことができ、とても勉強になった。今後は、この経験を活かし色々なことに挑戦していきたいとおもう。



口演 3-10

望月海咲（日本体育大学保健医療学部救急医療学科1年）

「学内で発生した熱中症に対する救護対応について」

抄録

【症例報告】部活動の休憩時に屋外トイレ内にて倒れていた傷病者を友人が発見し、その後、近くにいた救急医療学科の学生に応援を要請した。現場バイタルからII度の熱中症が疑われたため、動脈の冷却、水分・塩分補給、体位管理、搬送、経過観察を学生と教員が行った。【考察】反省点として、担架で搬送するのが遅かった、涼しい部屋へ搬送する判断が遅かったということが挙げられる。これを改善していく為に、学内で傷病者が出た時の体制、熱中症に対する認識を変えていくべきであると考え。まず、学内で傷病者が出た時の体制の改善例としては、救助資材の設置場所の把握や健康支援センターの利用方法を学生、教職員を含めた全員が共通認識として持つことなどが考えられる。また、本大学の緊急時マニュアルである「学内における救急救命の手引き」の内容改善及び、普及も行っていくべきであると考え。次に、熱中症に対する認識の改善例としては、一般の学生や学友会に向けたファーストエイド講習会の開催が有効的であると考え。その際に、症状のチェックリストなどを作成し、一般の学生も重症度判断ができるようになればより良い応急手当、二次救命処置に繋がり、社会復帰率が上昇すると考えられる。【結語】学内で傷病者が出た時の体制、熱中症に対する認識を変えていくべきである。

発表を終えて

私は、今回が初めての傷病者対応で自分の力の無さを痛感させられました。先生方や先輩方、救急隊の実際の活動を間近で見るという大きな経験をしたことで、4年後に私が目標とする姿が明確になりました。その目標に向かって勉強に励んでいきたいと思えます。

また、研究会発表も初めての経験で、資料作成から発表まで多くの人に助けて頂き、多くの課題も見つかりました。それらの課題を改善し、今後の発表に生かしていきたいです。



パネルディスカッション「日体大 救急医療学科の将来展望」

司会：野口英一（保健医療学部学事顧問）



第 1 回日体大救命蘇生研究会における本パネルディスカッション「日体大 救急医療学科の将来展望」は、時機を得た意義のある企画であったと思う。

本救急医療学科は創設 4 年を経て本年 3 月に初めての卒業生を出している。すなわち学科として完成年度を迎えたことになるが、本パネルディスカッションの演者の中には、小川学科長をはじめ教員として又は学生として、それぞれの立場から学科創設以降のフロンティアとして並々ならぬ努力と献身により本学科としての実績を積み重ね、歴史を作ってきた方々がおり、フロンティアとしての実績等を踏まえ将来に向かって本学科の展望を語っていただくことが大いに期待できたからである。

本医療学科の創設期における学生としての立場から話をした演者は、学科内の学生活動として積極的に学部内の連携、他大学との連携に努めたことを強調し、期せずして「連携」をキーワードとしたものであった。

このことは、本救急医療学科が育成を目指す「救急救命士」が、病院前救護活動を行うにあたってのメディカルコントロール(医学的質の保証)としての医療との連携、バイスタンダーとしての市民との連携、災害時救護としての関係機関との連携等、救急救命士の活動自体が社会的活動であり、このような救命士の社会性を理解し、本医療学科創設期の学生が、自主活動としての他との連携を積極的に形成する特性ある歴史を作ってきたことについて称賛するとともに、指導に当たった教職員の方々の指導力に敬意を表するものである。

一方創設期における教員として話をした演者からは、学生ファーストの信念のもと、短期間の中に他大学にはない特性のある教育機会が学生に提供されていることが話された。代表例が名門ワシントン大学との連携による「米国シアトル救急車同乗研修」である。

本研修は、学科として国際的視野に立った救急救命士教育の道筋を造ったものであるが、学科実績のない中での交渉の末に研修を実現させたことは奇跡に近く、人知に尽くしがたい交渉を行ったことが伺えるとともに、本救急医療学科の教育にかける膨大なエネルギーを感じるものである。

このような創成期の惜しみない教員たちの努力により、本救急医療学科は実績を積み、歴史を形成し、災害時救護活動指導者の育成、国際的に活躍できる人材の育成等を目標とした教育が積極的に行われている状況を伺うことができる。

そして教員としてのあらたな学科目標として、世界で一番の救急医療学科を目指すことが宣言され、学生教育にかける熱い思いが伝わってきた。

さらに、現職の消防職員で大学院に入学した演者からは、生涯を通じた勉学の必要性が語られた。

教員である演者からは、卒業後においても卒業生とのつながりを持つことが話されているが、本年大学院も設置されたことから、本救急医療学科には、救急救命士の養成とともに生涯にわたる救急救命士教育の場として、教育、研究機能の強化が一層求められているものと考えられる。

終わりに、小川学科長が「救命士による救命士教育実施」を推進していくことが話された。

本件の具体化には、人間性、社会性、知識、技術等のあらゆる面でリーダーである救急救命士の育成が不可欠である。

本学科においては、是非、世界に通用し、指導者としての能力を有するスーパー救命士の育成を期待するものである。



パネルディスカッション1

須賀涼太郎

(日本体育大学保健医療学部救急医療学科助手)

「学科間交流による発展」

抄録

私は日体大生として学業や部活動、災害ボランティア活動等に励んできた。他大学のトレーナーや体育教師、養護教諭を志望する学生に心肺蘇生法や応急手当の講習会を行ってきた。日体大には体育学部、児童スポーツ教育学部、整復医療学科と同じ夢を持った学生が多く存在する。私は他大学の学生に講習会を開催することで、自分の勉強となり、今後自分が何を学ぶことが必要であるかが明確になった。本学の学生には、様々な知識や情報の共有をして、さらに自分を磨いてほしい。日体大の強みであるスポーツとこれから創っていく救急医療を結び付けて、多方面から活躍できる者になってほしい。

発表を終えて

パネルディスカッションでは伝えられなかったが、学科のシンボルには「命の重さ、大切さ」と「世界へ巣立てる学生となる」と意味がある。在学生や入学を希望する生徒には、大学で命を守るために勉学に励んでもらいたい。先生方から日体大の展望を聞き、日本一になるためには学生に負けぬよう私自身も学びを継続する必要があると感じた。



パネルディスカッション 2

北野信之介

(日本体育大学保健医療学研究科保健医療学専攻救急災害医療学コース1年)

「学生間交流で可能性を広げる」

抄録

【背景】大学4年間、日本体育大学での活動だけでなく他大学の学生と様々な活動をしてきた。救急医療の分野や災害医療の分野、国際保健の分野と様々な分野で様々な職種の医療系学生と交流を持ち勉強会などを開催してきた。【現在の活動】大学4年間で得た経験と知識、人との繋がりが現在の活動に繋がっている。

現在は、災害支援を行なっているNGOや東京都南多摩医療圏ワーキンググループ、国際保健分野でのNGOに所属し活動している。【今後の活動】大学4年時に企画運営した学生メディカルラリー2018が最も印象深く残っている。メディカルラリーを日本体育大学で開催し、学生が病院前医療に関して学べる場を設けると共に学生間交流できる場も設けたいと考えた。【日体大の将来展望】学生間交流を積極的に行い、さまざまな視点から医療を学ぶ学生が、人間性を高め、医療人として大きく成長し、日体大の発展の中心的人物になると考える。

発表を終えて

普段はなかなか伝えられないことを、パネルディスカッションを通して自分の思いと後輩へのメッセージを伝えられた。先生方の日体大への想いと信念を聞くことができ、素晴らしい環境で学んでいるということを改めて感じました。

救命蘇生研究会は、今後様々な大学、組織、職種の方々が集結しシアトルのTuesday Seriesのようなカンファレンスになると思います。今後も救命蘇生研究会で挑戦し続けたいと思います。



パネルディスカッション3

藤本賢司（横浜市消防局）

「大学院進学を考えた理由」

抄録

私は横浜市消防局に入局して34年が経過、救命士資格取得後26年経過しました。救急救命士として横浜市消防局消防訓練センター教育課で5年、横浜市消防局の救急教育に携わりました。その後、救急医療財団、ELSTA 東京で2年間、全国から選ばれた研修生相手に救急救命士の養成教育を行ってきました。その間にも様々な研究を行い学会発表等や雑誌への投稿を行ってきました。現在は後輩を指導する指導的な立場で活動を行っておりますが、これまでを振り返ったところ、色々な検証や実験を行い発表を行ってきましたが結果がないことに気づきました。やはり実施したことは論文にまとめて発表しておかないと実施した意味がないと思っていました。そんな時に小川教授から、大学院へのお誘いを、受け話を聞くうちに大学院を受験してみようと思っていました。最終的に進学を決めた理由は「日本体育大学大学院と一緒に勉強をしていきましょう」「日本一の救急救命士を育成する大学にいきましょう」と言う小川教授の熱い言葉で受験を決定しました。

発表を終えて

今は大学院に進学して良かったと思っています。良き同期生、教授、学科スタッフにお会いでき最高の環境で学べる日本体育大学大学院は最高の大学と思っています。特にシアトルでの救急同乗、ヘリ同乗を経験し何物にも代えられない経験ができたと思っています。この環境を作っていただいたスタッフに感謝しています。



パネルディスカッション4

吉田茂男（救急救命専門指導教員）

「地域消防機関との連携と将来展望」



抄録

【背景】平成26年、本学に救急医療学科が設置され1期生が入学。同28年、3年生対象に救急車同乗実習を開始。同30年、1期生の卒業並びに就職等を迎えた。【方法】横浜市消防局として学生の救急車同乗実習の受入れは始めてであり、当時吉田は、同消防局救急課に勤務していたことから、救急隊員らに対して、消防の視点からアンケート調査を実施した。【結果】受入れた救急隊は28隊で、アンケートに回答した隊員は95名であった。①「学生に現場活動の知識、技術、接遇などについて、ある程度教えることが出来たと思うか」については、「ある程度出来たと思う」が81%（77人）、②「学生を指導することで、前向きな刺激や勉強になると思うか」については、「そう思う」が55%（52人）という結果が得られた。また、「指導した自分自身の知識の再確認と技術の向上にもつながった」や、「何より指導することで自分たちにもいい経験になった」などの記述意見も得られた。【考察】救急車同乗実習は、今後の学業成績や就職にも影響を与える最も大切な研修である。指導にあたる救急隊員もそれらを認識することにより、より実習効果を挙げようと努力し、双方にとって、Win-Winの関係になっていたことが確認された。【結語】平成30年、横浜市消防局に本学救急医療学科から5名が就職した。国からは、救命士が救命士を教えていくという指導救命士の仕組みも構築された。今後、本学の卒業生が指導救命士になる日も決して遠くはない。

発表を終えて

消防機関において長年の業務経験を有する救急救命専門指導教員として、昨年から4年生を中心に模擬面接などの就職指導を行ってきました。自分自身、採用試験の面接委員経験があることから、そのノウハウが十分に活かせたと思っています。すでに今年も消防を含めた公務員試験に合格した学生が続出しており、自分自身のことのように感動しています。救急医療学科の卒業生が地域消防機関の基盤を支えていく日々を夢見て、これからも一層学務に励んでいきたいと思いました。

パネルディスカッション5

中澤真弓

(日本体育大学保健医療学部救急医療学科准教授)

「 - 挑戦 - 」



抄録

私は、時代と環境に恵まれ、救急業務に関わることができた。平成6年に東京消防庁へ入庁した。同時期に女性労働基準規則が改正され、女性の救急隊員が誕生した。20代は、救急隊員・救急機関員として多くの経験をさせていただいた。30代では、救急隊長として活動した時期に、気管挿管や薬剤投与などの救急救命士の処置拡大があり、その後は消防学校教官・消防署救急技術担当係長として救急隊の指導者になった。40代になってからは、これまでの現場経験を学問の世界で活かしたいと思い、「健康科学」「防災政策」の2つの修士課程を修了し、現在に至る。

日本体育大学に籍を置いたのは、小川教授や鈴木准教授と出会い、「世界最高峰の救急救命士養成所を作りましょう！」を合言葉に夢を持って人材育成に取り組む姿勢に魅力を感じたからである。その実現のために私が挑戦することは、①救急に関する社会問題解決を目指した研究②女性救急救命士の育成③「日体大救命蘇生研究会」の発展④国を超えた連携⑤一般市民に「救急を伝える」という5つの『目の前の課題に一生懸命取り組む』ということである。

「世界一なんて、何を馬鹿なことを。」と思う人もいるかもしれない。そんな時、20年前を振り返る。当時は多くの人に、「女性の救急隊長になる？無理だ、迷惑だ」と言われた。しかし、目の前の課題に一生懸命取り組んでいたら、10年後に私は救急隊長になっていた。前例のないことを恐れず、私はこれからも挑戦していきたい。

発表を終えて

私は、社会人経験の多くを消防機関で過ごしました。救急隊の仕事は辛い部分もありますが、それ以上にやりがいがあります。私の感覚では、「命を助ける」というよりも、「どこかで誰かが私を必要としてくれているんだ」という自己肯定（自分がこの世に存在する意義）を見出すことができた職務です。現在、国内の女性の救急隊員はわずか2%です。自分の経験を伝承することによって女性の救急隊員が増えることを願います。

パネルディスカッション 6

鈴木健介（日本体育大学保健医療学部救急医療学科准教授）

「日本体育大学 救急医療学科の将来展望」

抄録

2014年に開設された救急医療学科は、総合的な実践力を持った救急救命士を育成している。「救急」「災害」「国際」を3つの柱として、①救急医療に関する知識技術の習得、②災害現場でのリーダーシップ育成、③国際的に活動できる人材の育成をしている。

救急医療学科の教員として、5年以内に日本で1番、10年以内に世界で1番の学科にするという目標を掲げている。そのために、私自身が「世界一の救急救命士」を目指し、プロフェッショナルとして成長し続ける必要がある。

世界一の救急医療システムと言われているシアトルで、日本の救急救命士として初めてTuesday Series（シアトルで行われている医師・救急救命士のカンファレンス）で講演をした。救急救命士として、教員として挑戦し続ける姿を学生に見せることで、世界一の救急救命士学生を育てたい。そして、日本体育大学救急医療学科を世界一の学科し、1人でも多くの傷病者を助けることに貢献したい。

発表を終えて

学生に対してこのような話をする機会がなかったので、非常に恥ずかしい気持ちになりましたが、私自身の気持ちを伝えることができる良い機会だったと思います。発言した内容に責任を持ち、全ての学生を世界一にできるよう挑戦していきたいと思います。



パネルディスカッション 7

小川理郎（日本体育大学保健医療学部救急医療学科学科長・教授）

「日本体育大学 救急医療学科の将来展望」



抄録

なぜ我々の救急医療学科は、世界一をめざすのか？世界一を目指さなければならないのか？その理由は大きく3つです。まず私は127年の歴史と伝統を誇る日本体育大学に赴任したからです。トップアスリートは、子供のころから厳しいトレーニングを人一倍繰り返して、絶え間ない努力をしています。オリンピックで金メダルを獲得し、世界一になった数多くのアスリートが日体大にいますので、当然我々の保健医療学部、救急医療学科も、負けてはいられません。

また、私自身は、日本の救急医療を創世記から牽引し、今も指導的な役割を果たしている日本医科大学付属病院高度救命救急センター、日本医科大学救急医学教室の“日医の救命”の生え抜きの医局員で、日本では数の少ない救急医療の指導医として、救急医療の第一人者としての自負があります。さらに新学科の教育指導、大学実績などは、世界一という高い目標を掲げれば、それだけ、やる気、モチベーションの向上につながるからです。

さて超高齢社会を迎えて、救急救命士の活躍の場は、消防以外でも、あらゆる場所に広がってきています。さらに我が国は先進国として、世界の保健医療事情に無関心ではいられないでしょう。日本の代表として世界に恥じない病院前医療（Prehospital Medicine）の専門家になり、世界に目を向けて、大きく羽ばたいて貢献してほしいと思います。救急救命士は、生命危機に瀕する人たちや災害現場で、相手の立場に立って、沈着、冷静に臨機応変な対応と的確な医療活動を実践することが求められます。当学科から何人もの優秀な人材が輩出されれば、とても喜ばしいことです。そのような人材を生涯に渡って育成しなければなりません。

すでに当学科は、ワシントン大学（UW）Medicineのparamedicコースと交流を持ち、蘇生率60%を誇る世界No.1のアメリカのシアトル市でMedic Oneの救急車同乗実習とパラメ

ディックの医療システムの研修を実施しています。さらにハーバービューメディカルセンター病院では、ドクターとパラメディックが合同カンファレンスを行い、また EMS の Medical Drill にも参加して、世界最高の病院前医療とその教育システムを視察してきました。その教育理念を踏まえて質の高い救急医療の実践的な教育指導が行えます。今後はより素晴らしい教育とそのシステムを整備して維持しなければなりません。大学に求められる学術研究、地域貢献にも成果を出して、独自治を持ち、高い評価を獲得する必要があります。自己成長は学科の発展となり、それは大学の発展につながります。大学は指導教員と卒業生のそれぞれの社会的立場や貢献度によって評価されます。大学教員は、学生の心にいかに火をつけて、厚い教育するか、学生の立場を考慮した指導法を追求する必要があります。学生自身が、自ら学習意欲にめざめたとき、柔軟で独創的な発想のできる優秀な人材へ育てて行くことでしょう。医療人としての最終的な帰着は、人間性、人間力だから、学生のうちに共感的態度、支持的態度を理解する必要があります。それには、医療人の心を持った優秀な教育者、指導者をいつも参集しなければなりません。

近年、医療は多職種が連携して傷病者の診療にあたるようになりました。救急救命士は、医師や看護師、他の医療スタッフから信頼され尊敬されなければなりません。特に医師から認められ尊敬される救急救命士になってください。学生は大学の4年間に、しっかりと勉学に励んで、指導教員はそれを真摯に指導する必要があります。医師でなく、救急救命士が救急救命士を教育する大学へと近いうちに変貌してほしいと思います。そのようになれば、発症直後での Rapid Response Emergency Care が確立し、傷病者の Preventable Death (避けられた死亡) が減少します。日体大の卒業生は、救急救命士による自己研鑽と一貫した生涯教育のさらなる態勢づくりにも関与して、一刻も早く救急現場学を学術として確立させてください。日体大の救急医療学科から病院前医療に革命を起こしてください。挑戦のゴールは、傷病者と医療人から尊敬されて高い信頼を得ることだと思います。最後に世界に類をみない安全、安心な日本社会の基本は、家族構成がしっかりしていることにあります。我々の生活基盤、心のよりどころは、絶え間ない家族の笑顔にあります。我々はすべてを尽くして、家族を守るために頑張るということを忘れないでください。

発表を終えて

救急医療学科、救急救命士に期待することが多く、厚く語りすぎたと思います。病院救護/医療を指導してきた立場からは、この領域は救急救命士が主役です。日体ファミリーとして一丸となって挑戦していければと思います。

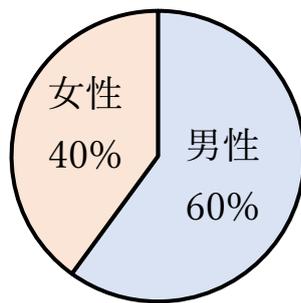
来場者アンケートの結果

来場者 126 人中 35 人が回答 (27.7%)

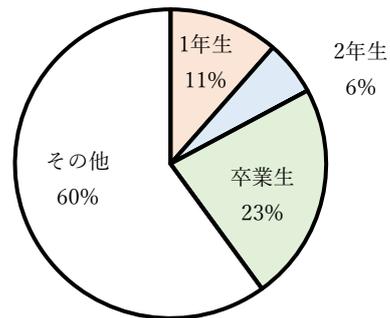
※自由記載は、原文ママ

1. 回答者の属性 (n=35)

(1) 性別

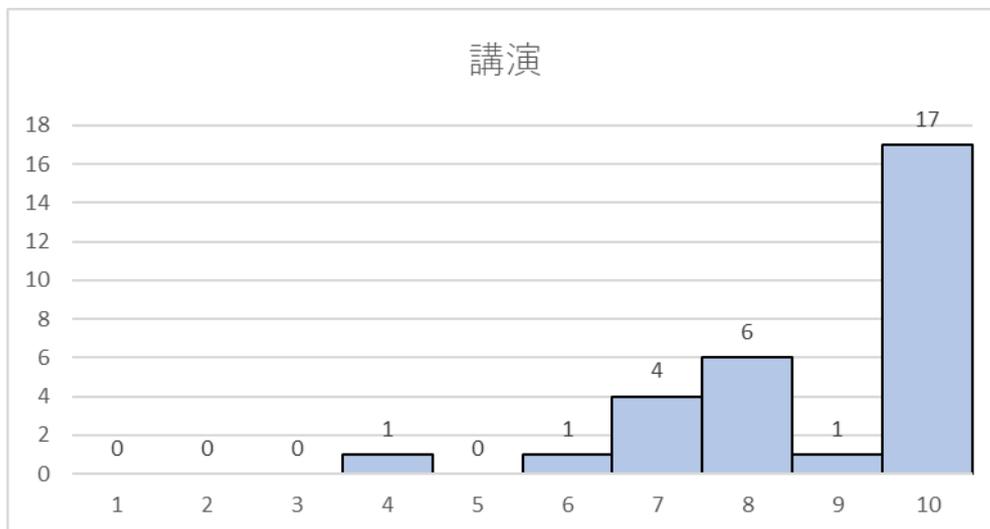


(2) 学年



2. 講演（基調講演・特別講演）の満足度及び意見、感想 (n=30)

(1) 満足度 (10 段階で評価)



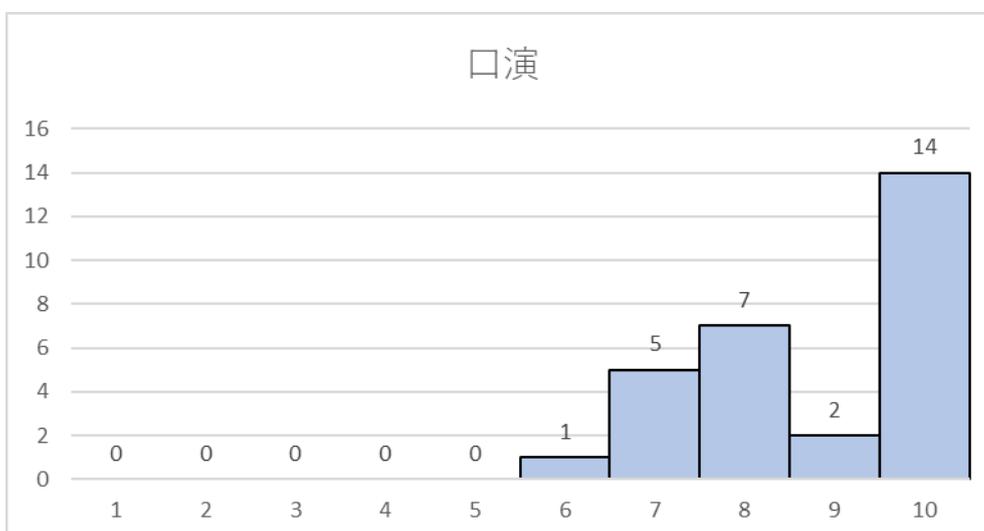
(2) 意見、感想

- ・自分が進みたい道が広がりました。
- ・専門知識ばかりでまだ分からないことだらけだが、救急救命士の将来を見据えることができ、貴学に入学して努力していきたいと改めて決意できました。
- ・入試の勉強になった

- ・ 普段聞けない話を聞くことができたので良かったです。
- ・ 救急救命士の立場としてこれから何に取り組むべきかを示していただき良かった。
- ・ 山本保博教授のお話を聞いて良かった。元々知っていて、僕は尊敬する人である。
- ・ 普段聞くことのできない貴重な話を聞くことができました。
- ・ 田邊晴山先生など、とても素晴らしい先生の貴重なお話をうかがえました。

3. 口演（口演①、口演②、口演③）の満足度及び意見、感想（n=29）

(1) 満足度（10段階で評価）

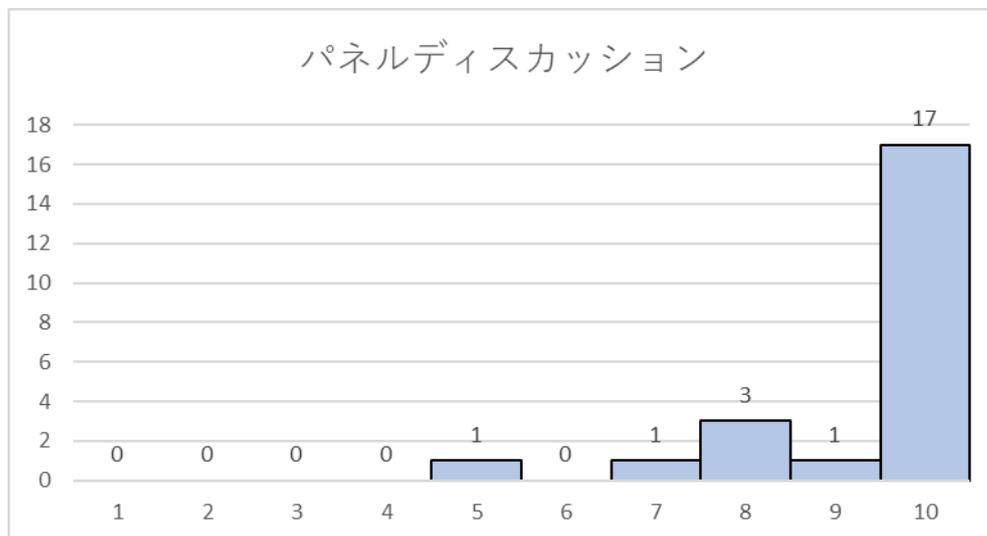


(2) 意見、感想

- ・ 新しい興味が増えました。
- ・ 1年生から発表されていて、将来私も発表の場に立てるような人間としての成長をしたいと思います。
- ・ 入試の勉強になった
- ・ 先輩たちの活動を知れて良かったです。
- ・ 若い学生さんの発表の一生懸命さが伝わりました。
- ・ もう少し自信をもっていい。声を出せていなかった。
- ・ とても参考になるためになる話が多かった。
- ・ 発表に向けてどの学生もまとめていた点。
- ・ わかりやすいパワーポイントを、要点を短い時間の中にしっかりまとめていました。素晴らしいご指導だったと感じました。

4. パネルディスカッション「救急医療学科の将来展望」の満足度及び意見、感想 (n=23)

(1) 満足度 (10段階で評価)



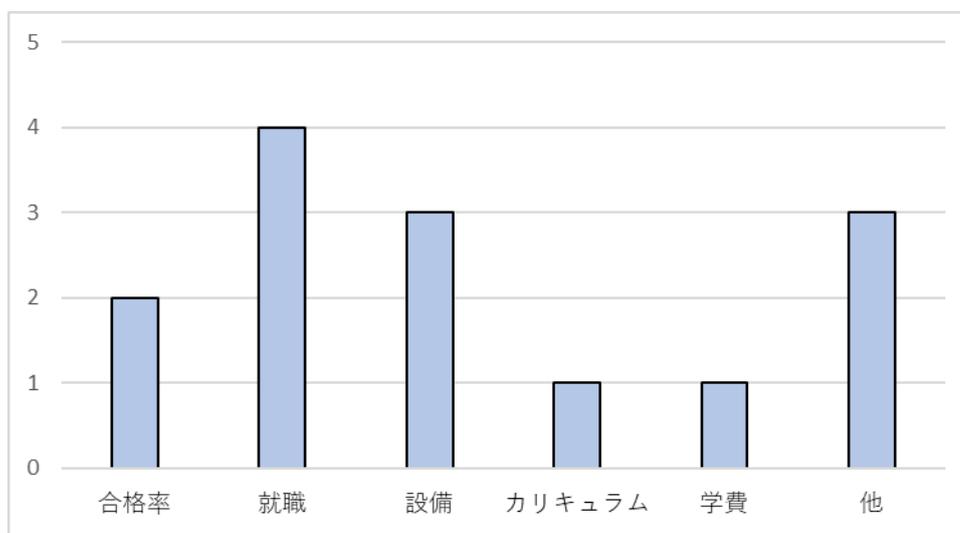
(2) 意見、感想

- ・先生方の思いに答えられるように頑張ります。
- ・世界一の学科となるため先生方の思いが詰まった救急医療学科の一員となって勉学に励んでいきたいです。
- ・学校がどのような生徒を育成しようとしているかが伝わってきた。
- ・とてもためになったと思う。詳しく聞きたいこともあったがよかった。
- ・時間的に聞くことができず分かりません。

5. 今後、本研究会で取り上げてほしい内容

- ・救護活動をしたことについてもっと聞きたいです。
- ・救急車同乗実習について
- ・バイスタンダーによる処置の普及
- ・実際の現場活動の流れ
- ・もっと長くやってほしかった。
- ・テロ対策
- ・体育大学の強みを活かした研究等
- ・「世界の救急医療と日本の救急医療の差」みたいなものが聞きたい。
- ・職員研修
- ・救命活動後の隊員の惨事ストレス（メンタルに関する事項）救命士としての各種コミュニケーション（接遇）について。
- ・救急のトピック、最新の病院前医療
- ・外傷症例発表会

6. 救急救命士養成校を選ぶときに最も重視する要素（学生向け質問）（n=14）



その他の意見として、「教員」「教授陣」「将来の夢」があった。

7. 救急医療学科はどのような学科を目指してほしいか

- ・ 世界一（5人）・世界一の学科・世界一の学科を！・世界一の救急医療学科
- ・ 世界に共通する技術を身につける学科を目指してほしいと思います。
- ・ 幅広い活動の場を提供できる学科、救急救命士のレベル高い人材育成する学科。
- ・ 日本の救急医療を代表する大学を目指してほしいと思います。
- ・ 幅広い分野（消防以外）で活躍できる救命士の養成、視野の広い救命士の養成。
- ・ 世界で通用する人材を育成する大学を目指してほしい!!
- ・ 自分の目指す目標を達成できるような学科になってほしい
- ・ 傷病者の気持ちに寄り添った救命士を養成してください。

8. 本研究会についての意見・感想

- ・ 大変勉強になりました。来年は発表する側として参加したいと思いました。
- ・ 普段は聞けないようなお話をたくさん聞けて良かったです。自分も頑張ります。
- ・ 世界一の学科を作るという、鈴木先生・中澤先生・小川先生の言葉に感動しました。学生のレベルも高く驚かされっぱなしの1日でとても充実した日になりました。ありがとうございました。
- ・ 大変勉強になりました。次は自分で発表できるように勉強します。
- ・ 質疑応答の際、マイクの行動の方法を工夫することでより良い研究会が今後期待することができると思います。
- ・ 来年もやってほしい。
- ・ 来年もぜひ参加させていただきたいです。

- ・救急救命士っていいなあと改めて思える発表ばかりでした。こんな素晴らしい先生方に恵まれた学校なら、絶対に世界一の学科は現実のものになると信じてます。本日はありがとうございました!!
- ・非常にいい刺激になりました。日体大関係者だけでなく、もっと対象を広げてほしいです。
- ・毎年の開催を期待しています。
- ・日体大に入って「第2回日本体育大学救命蘇生研究会」に出てみたいです。今日はありがとうございました。
- ・ワークショップに参加させていただきました。いつもながら大変勉強になりました。学生さんも優秀で、グループワークの進め方も上手です。私はYTですが、医療系に進む学生さんも人とかかわる仕事です。学生のうちに色々な方とかかわるのはすごく大事だと思います。学生の皆さんのご活躍を祈っています。
- ・ワークショップとてもためになりました。学校で研修するために、いろいろ考えて実施検討したいと思いました。
- ・毎年、心肺蘇生の研修は実施していましたが、救急車要請や保護者への連絡等、実際に必要な役割分担についても研修が必要だと感じました。ありがとうございました。
- ・とてもよかったです。ありがとうございました。
- ・HPより本日の発表会を知りました。興味があり参加させていただきました。ありがとうございました。
- ・救急隊員の現場活動後に起こるメンタルの変化など救急活動は自らの命の危険を感じず中での活動もあり、その時のメンタルの強さが必要であると思われます。
- ・示唆に富む内容でした。ありがとうございました。また参加したいです。
- ・次回も楽しみにしております。
- ・素晴らしい研究発表会でした！感動いたしました。これからも楽しみにしています。一般の方にもぜひ聞いてほしいですネ！ありがとうございました。

参加者一覧（敬称省略・アイウエオ順、参加申込フォームの氏名で記載）

秋山隆翔	北野信之介	田邊晴山	横山愛美
渥美栄一	北本大喜	寺口祐輔	吉澤美海
阿部雅治	久保田理沙	長岡春樹	吉澤裕子
天野智仁	栗屋天翔	中澤真弓	吉田茂男
新井直子	玄正慎	長沼史朗	若松弘樹
五十嵐ひろき	郡愛	中野昇	渡辺孝
幾田雅明	小島拓馬	長橋和希	渡辺雄太
池沢司	小玉 響平	中村さやか	フクシマチエ
池田匠	小玉容子	鳴海圭佑	モモ
石塚雄太	小峰達也	西村勇政	貴志知恵子
伊藤彩奈	小宮一輝	西本好希	宮地あゆみ
伊藤俊孝	小宮真由美	根本春香	高久尚子
伊藤詩温	齊藤千真	野口英一	坂本早由里
井上将仁	坂口真澄	萩原鈴香	篠原仁美
今村正彦	坂田健吾	服部充宏	秋山茉弓
上野浩乃	佐藤功樹	原田諭	新井直子
鵜飼駿	佐藤隆彦	藤田千春	長谷川友香
宇賀谷仁充	佐藤雄次	藤本賢司	内田貴美子
宇田川美南	佐藤ゆずほ	布施美奈子	内藤妙
大久保隆弘	佐藤理玖	古正風沙	薄井葉子
大島健太郎	佐野光	古御堂洸世	八巻愛
大平駿	澤地咲樹	松井優介	布施美奈子
大松健太郎	篠田櫻	緑川亮	木村紘子
大類拓也	島田健太郎	宮永彩加	矢口真由美
岡野透	清水勇助	宮野由紀子	
小川理郎	白井久美	望月智恵	
小倉勝弘	城間玲弥	望月海咲	
長内彩乃	須賀涼太郎	山崎大介	
小澤貴裕	鈴木健介	山田純子	
兼田元樹	砂川雅貴	山田桃由	
我満ゆうき	高橋治花	山名弘将	
上村実	高山航	山本保博	
河原義昌	竹内栄一	山本玲子	
川邊貴大	田中遥也	横井智子	

編集後記

このたびは、「第1回日本体育大学救命蘇生研究会概要集」の編集にご協力をいただき、ありがとうございました。第1回ということで前例がなく、研究会の開催も概要集の発行も手探り・手作りの状況で、多くの方のご協力をいただきながら完遂いたしました。

2018年4月、私は本学に着任いたしました。そのわずか1ヶ月後、研究室長より本研究会の運営を拝命し、本当に実行できるのか…戸惑い、悩む日々が続きました。運営に協力してくれた同僚に励まされ、発表の準備に毎日夜遅くまで頑張っている学生たちや指導に携わられている先生方の姿を見て、鼓舞される日々でした。研究会当日は、在校生や卒業生のみならず、本学の受験を検討している高校生や、お世話になっている医療機関や消防機関の方々、そして、学生を温かく見守る保護者の皆様など、多くの方にご来場いただき、この研究会の開催に「挑戦」して良かった！と心から感じることができました。そして、次回の「第2回日本体育大学救命蘇生研究会」では、さらに多くの学生に学びの機会が得られるように、より高い目標を掲げて取り組んでいきたいと思えます。

手元に届いた概要集の原稿を読ませていただくと、研究会当日のことが改めて思い出されます。皆様がこの概要集を読み返し、各々の「挑戦」を思い起こしていただければ幸いです。まだスタート地点に立ったばかりの私達です。いつか、この冊子が立派な学会誌となる日を夢見て、今後も「挑戦」していきたいと思えます。

2018年12月吉日

第1回日本体育大学救命蘇生研究会概要集

編集委員長 中澤 真弓